OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学・京都大学　公共圏における科学技術　活動報告2025
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104117
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

STiPS 公共圏における
科学技術・教育研究拠点（STiPS）
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

大阪大学・京都大学

公共圏における科学技術
活動報告

2025

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか 3

- 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について 4

1. 教育プログラムの実施 6

- 大阪大学の取り組み 7
- 大阪大学 特色ある授業 16
- 京都大学の取り組み 18
- 京都大学 特色ある授業 23
- 合同講義 25
- STiPS 修了生とのつながり 30

2. プログラム推進委員会の運営 31

- 実施体制 32
- カリキュラムの調整 33
- 研究会やイベント開催の企画及び調整 34

3. SciREX 事業への参画 37

- サマーキャンプへの参画 38
- 他拠点への講師派遣 42
- 研修などへの講師派遣 42

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施 43

- 「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発 44

5. 共進化実現プログラムの実施 46

- ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発 47
- 科学技術政策における博士号を保有する人材活用に関する調査研究 48

6. 関西ネットワークの発展 50

- STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか） 51
- サイエンスカフェ＠千里公民館 58
- その他 59

7. 国際連携の推進 62

- 国際連携 63
- 海外調査及び発表等 63

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等） 64

- 大阪大学 65

- 京都大学 70

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」（Select Committee on Science and Technology 2000）

この一文は、英国で 1990 年代末に過熱した遺伝子組換え作物（GM）論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものです。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第 4 期科学技術基本計画（2011 年）においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠（エビデンス）」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国の GM 論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与（public engagement）」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階（アジェンダ形成段階）を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題（期待や懸念、問題）を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 設立拠点長　小林傳司（大阪大学）

公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere：STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012 年 1 月に発足しました。なお、同推進事業には 5 拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通した人材の育成を目指しています。

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。



こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。

研究拠点としての STiPS

STiPS では、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的 課題(ELSI)に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をより的確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2026 年 3 月現在）

大　阪　大　学			
小林 傳司	大阪大学	名誉教授／設立拠点長	科学哲学、科学技術社会論
平川 秀幸	大阪大学 CO デザインセンター	教授／拠点長	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学 CO デザインセンター	教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
辻田 俊哉	大阪大学 CO デザインセンター	准教授	国際関係論
鹿野 祐介	大阪大学 CO デザインセンター	特任講師	人とヒトをめぐる哲学・倫理学、哲学対話教育
松村 悠子	大阪大学 CO デザインセンター	特任講師	環境社会学、島嶼研究
武田 浩平	大阪大学 CO デザインセンター	特任助教（非常勤）	動物行動学、科学コミュニケーション
小林 万里絵	大阪大学 CO デザインセンター	特任研究員（非常勤）	科学コミュニケーション
西川 晃弘	大阪大学 CO デザインセンター	特任研究員（非常勤）	科学技術社会論
神里 達博	大阪大学 CO デザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学 D3 センター	教授	リスク評価、社会経済分析
水町 衣里	大阪大学社会技術共創研究センター	准教授／URA	科学コミュニケーション論、科学教育
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
井出 和希	大阪大学感染症総合教育研究拠点	特任准教授	社会医学、疫学、政策科学、応用倫理学
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	客員教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」

京　都　大　学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授／ユニット長	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	教授	科学哲学、倫理学
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
岩下 直行	京都大学公共政策大学院	教授	フィンテック
宇佐美 誠	京都大学大学院地球環境学舎	教授	法哲学、政治哲学
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
川崎 穂高	京都大学公共政策大学院	特別教授	地方自治、地方財政
北野 慎一	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経済、政策評価
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
関山 健	京都大学総合生存学館	教授	国際政治経済学、国際環境政治学、開発政治学
中山 健夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
カール・ベッカー	京都大学大学院医学研究科	特任教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
森川 輝一	京都大学公共政策大学院	教授	政治理論、政治思想史
吉田 恭	京都大学経営管理大学院	特定教授	都市計画、まちづくり
丹羽 良太	京都大学 iPS 細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
祐野 恵	京都大学大学院医学研究科	特定准教授	公共政策、地方自治、地方議会
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
小泉 志保	京都大学大学院医学研究科	特定助教	社会医学、ヘルスコミュニケーション、グローバルヘルス
白井 哲哉	京都大学総合研究推進本部（KURA）	URA（上席）	科学技術社会論、科学コミュニケーション

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

大阪大学の取り組み

大阪大学　大学院副専攻プログラム／大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」、大学院副専攻プログラム／大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016 年 6 月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」（2025 年度以降、募集停止）、2025 年 4 月より「公共圏における科学技術」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」および「公共圏における科学技術」の修了には、14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」および「公共圏における科学技術」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めてきました。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」（2025 年度以降、募集停止）、2025 年 4 月からはリューアルした「公共圏における科学技術」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」および「公共圏における科学技術」の修了には、8 単位以上の修得が必要です。

大阪大学　大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト＋」概要

2022 年 4 月からは、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」を修了した後の博士後期課程の学生を対象とした発展コースとして、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト＋」を新設しました。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」で取り組んだ研究プロジェクトなどを継続・発展させた研究活動（学会発表や論文公表、一般社会へのアウトリーチ活動などを含む）を行うことを目標にします。通常 2〜3 年間での修了を想定しています。修了には 14 単位以上の修得が必要です。2025 年度以降、募集を停止しました。

大阪大学　大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2025 年度　在籍者数の合計：11 人

履修登録者数：0 人

修了者数：2 人（進路内訳　在学中：2 人）

＊副専攻プログラムの修了証は 2019 年度までは、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度
履修登録者数：15 人（所属研究科内訳　文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、薬学：1 人、工学：2 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳　民間企業：2 人）

2014 年度
履修登録者数：14 人（所属研究科内訳　人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：3 人）
修了者数：4 人（進路内訳　政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　文学：1 人、理学：3 人、工学：2 人）
修了者数：4 人（進路内訳　内部進学：1 人、大学：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度
履修登録者数：12 人（所属研究科内訳　文学：2 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人）
修了者数：6 人（進路内訳　大学：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

2017 年度
履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　文学：1 人、理学：1 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：2 人）
修了者数：6 人（進路内訳　進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

2018 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、基礎工学：2 人）
修了者数：3 人（進路内訳　民間企業：3 人）

2019 年度
履修登録者数：17 人（所属研究科内訳　文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳　進学：1 人、民間企業：1 人）

2020 年度
履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　人間科学：1 人、理学：6 人、薬学：1 人）
修了者数：8 人（進路内訳　在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人、不明：1 人）

2021 年度
履修登録者数：7 人（所属研究科内訳　理学：３人、薬学：１人、工学：１人、基礎工学：１人、情報科学：１人）
修了者数：5 人（進路内訳　政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

2022 年度
履修登録者数：9 人（所属研究科内訳　人間科学：2 人、理学：３人、工学：2 人、情報科学：１人、人文学：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳　内部進学：1 人、民間企業：1 人）

2023 年度
履修登録者数：８人（所属研究科内訳　人間科学：１人、基礎工学：2 人、人文学：５人）
修了者数：７人（進路内訳　在学中４人、民間企業等：３人）

2024 年度
履修登録者数：11 人（所属研究科内訳　人間科学：2 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：2 人、人文学：2 人）
修了者数：5 人（進路内訳　在学中：3 人、進学：2 人）

副専攻プログラム「公共圏における科学技術」（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2025 年度　在籍者数の合計：1 人

履修登録者数：1 人（所属研究科内訳　人文学：1 人）

高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2025 年度　在籍者数の合計：11 人

履修登録者数：0 人

修了者数：2 人（進路内訳　在学中：1 人、不明：1 人）

＊高度副プログラムの修了証 2019 年度までは、学生が副専攻の 8 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、8 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 8 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

また、履修登録者数は、2023 年度から、副専攻プログラム登録者は高度副プログラムにも同時に登録しているため、人数計上には重複があります。ただし、高度副プログラムを修了後に、引き続き副専攻プログラムに改めて新規登録する場合や、副専攻プログラムに登録していた者が、主専攻の修了時に、14 単位以上には達しなかったが、8 単位以上が履修済みであれば、その時点で高度副プログラムに登録して修了とする場合があり、一年度で数名程度、そのような場合があります。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度
履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：3 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）
修了者数：0 人

2014 年度
履修登録者数：12 人（所属研究科内訳　人間科学：1 人、理学：1 人、工学：4 人、基礎工学：3 人、国際公共政策：2 人、生命機能：1 人）
修了者数：3 人

2015 年度
履修登録者数：10 人（所属研究科内訳　文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）
修了者数：5 人

2016 年度
履修登録者数：9 人（所属研究科内訳　人間科学：1 人、法学：1 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）
修了者数：8 人

2017 年度
履修登録者数：7 人（所属研究科内訳　理学：2 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、国際公共政策 1 人）
修了者数：8 人

2018 年度
履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　文学：1 人、医学系：3 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人）
修了者数：4 人

2019 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　理学：3 人、医学系：2 人、工学：1 人）
修了者数：4 人

2020 年度
履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人）
修了者数：9 人

2021 年度
履修登録者数：9 人（所属研究科内訳　人間科学 1 人、経済学 1 人、理学 4 人、工学 1 人、基礎工学 1 人、国際公共政策：1 人）
修了者数：3 人（進路内訳　在学中：2 人、民間企業：1 人）

2022 年度
履修登録者数：13 人（所属研究科内訳　人間科学：2 人、理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人、人文学：2 人）
修了者数：4 人（進路内訳　政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、その他：2 人）

2023 年度
履修登録者数：16 人（所属研究科内訳　人間科学：3 人、理学：4 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人、人

文学：4 人）
修了者数：18 人（進路内訳　在学中：12 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業等：2 人、不明：3 人）

2024 年度
履修登録者数：21 人（所属研究科内訳　人間科学：2 人、法学：1 人、理学：3 人、工学：7 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、人文学：5 名）
修了者数：14 人（進路内訳　在学中：11 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

高度副プログラム「公共圏における科学技術」（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2025 年度　在籍者数の合計：11 人

履修登録者数：11 人（所属研究科内訳　人間科学：2 人、医学系（保）：2 人、薬学：1 人、工学：1 人、基礎工学：1 人、国際公共：1 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人、高等司法：1 人）

修了者数：5 人（進路内訳　在学中：5 人）

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト＋」（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2025 年度　在籍者数の合計：0 人

修了者数： 0 人

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2022 年度
履修登録者数：3 人（所属研究科内訳　理学：2 人、人文学：1 人）
修了者数：0 人

2023 年度
履修登録者数：1 人（所属研究科内訳　情報科学：1 人）
修了者数：0 人

2024 年度
履修登録者数：2 人（所属研究科内訳　人文学：1 人、理学：1 人）
修了者数：1 人（進路内訳　大学：1 人）

大阪大学 副専攻プログラム「公共圏における科学技術」（修了要件 14 単位以上）　開講科目一覧（2025 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目：8 単位	CO デザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 1	平川 秀幸、他	2	春～夏
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 2	平川 秀幸、他	2	秋～冬
選択科目：6 単位	CO デザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春
	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：理論編	八木 絵香、他	1	夏
	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：実践編	八木 絵香、他	1	集中（秋）
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 A	辻田 俊哉	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 B	辻田 俊哉	1	夏
	CO デザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	CO デザインセンター（院）	実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション	八木 絵香、他	1	冬
	CO デザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	不開講
	CO デザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	CO デザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（秋）
	CO デザインセンター（院）	システム思考	山﨑 吾郎、他	1	集中（春～夏）
	CO デザインセンター（院）	デザイン思考	大谷 洋介、他	1	集中（春～夏）
	人文学研究科（博士前期）	科学技術社会論講義 II	中村 征樹、他	2	春～夏
	人文学研究科（博士前期）	科学技術思想史講義 II	中村 征樹	2	秋～冬
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後前期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（修士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）（ｴﾏｰｼﾞﾝｸﾞ ｻｲｴﾝｽﾃﾞｻﾞｲﾝ R^3 ｾﾝﾀｰ提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 A	宮坂 博、他	2	不開講
	基礎工学研究科（博士前期）（ｴﾏｰｼﾞﾝｸﾞ ｻｲｴﾝｽﾃﾞｻﾞｲﾝ R^3 ｾﾝﾀｰ提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 B	宮坂 博、他	2	集中(春～夏)
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬

大阪大学 高度副プログラム「公共圏における科学技術」（修了要件 8 単位以上）　開講科目一覧（2025 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目：4 単位	CO デザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
選択科目：4 単位以上	CO デザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春
	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：理論編	八木 絵香、他	1	夏
	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：実践編	八木 絵香、他	1	集中（秋）
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 A	辻田 俊哉	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 B	辻田 俊哉	1	夏
	CO デザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	CO デザインセンター（院）	実践者から学ぶ 科学技術コミュニケーション	八木 絵香、他	1	冬
	CO デザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	不開講
	CO デザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	CO デザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（秋）
	CO デザインセンター（院）	システム思考	山﨑 吾郎、他	1	集中（春～夏）
	CO デザインセンター（院）	デザイン思考	大谷 洋介、他	1	集中（春～夏）
	人文学研究科（博士前期）	科学技術社会論講義 II	中村 征樹、他	2	春～夏
	人文学研究科（博士前期）	科学技術思想史講義 II	中村 征樹	2	秋～冬
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後前期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（修士課程）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）（ｴﾏｰｼﾞﾝｸﾞｻｲｴﾝｽﾃﾞｻﾞｲﾝR³ｾﾝﾀｰ提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 A	宮坂 博、他	2	不開講
	基礎工学研究科（博士前期）（ｴﾏｰｼﾞﾝｸﾞｻｲｴﾝｽﾃﾞｻﾞｲﾝR³ｾﾝﾀｰ提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 B	宮坂 博、他	2	集中(春～夏)
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬

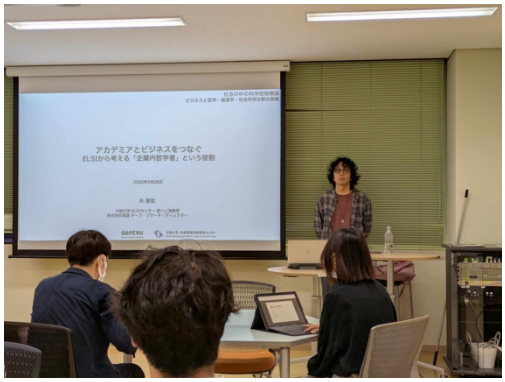
大阪大学 特色ある授業

「社会の中の科学技術概論」（春・夏学期 隔週水曜５・６限）

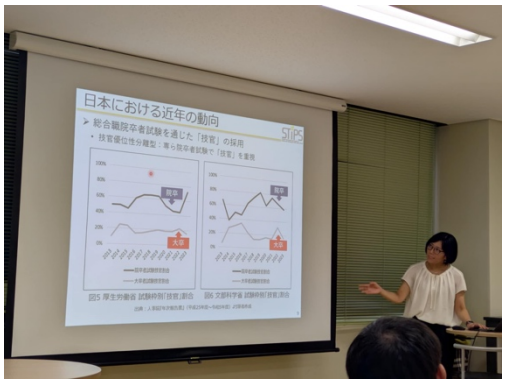
この科目は、ゲストレクチャーと学生同士のグループディスカッションとがセットになったオムニバス形式の講義・演習スタイルで運営されています。

社会の中で科学技術はどのような役割を果たし、どのような問題を惹起しているのか、人間・社会にとって望ましい成果を生み出すにはどうしたらよいのか、研究者や政策決定者、事業者、市民にはどのような責任や役割があるのかについて、科学技術の「倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Issues: ELSI）」の観点から、多角的に考えました。第5回までは講義、第6回以降はゲストによる講義（90分）と学生同士のグループディスカッション（90分）を行いました。各回の講義内容及び担当した講師は以下の通りです（ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの）。

第1・2回（2025年4月16日）
「イントロダクション」平川 秀幸（大阪大学 教授）
「社会の中の科学、社会のための科学：ブダペスト宣言の意味するところ」
小林 傳司（大阪大学名誉教授）
第3回（2025年4月30日）
「科学技術・イノベーション(STI)政策の現在～〈規範的転回〉と ELSI/RRI～」
平川 秀幸（大阪大学 教授）



第4・5回（2025年5月14日）
「イノベーション論入門」
辻田 俊哉（大阪大学 准教授）
「科学技術コミュニケーション」
八木 絵香（大阪大学 教授）
第6・7回（2025年5月28日）
「アカデミアとビジネスをつなぐ：ELSIから考える「企業内哲学者」という役割」
朱 喜哲（大阪大学 招へい准教授）
第8・9回（2025年6月11日）
「博士人材の活用：行政における専門性」
祐野 恵（京都大学 特定准教授）



第10・11回（2025年6月25日）
「理系女性はなぜ少ないのか」
横山 広美（東京大学 教授）
第12・13回（2025年7月9日）
「実践者から見た科学コミュニケーションの課題」
本田 隆行（科学コニュニケーター）
第14・15回（2025年7月23日）
「総合討論」平川 秀幸（大阪大学 教授）

「科学技術コミュニケーション演習」（集中講義［夏］）

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3 日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいます。

2025 年度は「幹細胞から精子や卵子といった生殖細胞を体外でつくる研究（IVG 研究）」をグループ討議の課題として取り上げました。講義は、IVG 研究をめぐる現状についての事前レクチャーから始まり、グループワークとして IVG 研究が進むことでもたらされる倫理的・法的・社会的課題を検討し、IVG 研究開発はどのように進められるべきか/どのような場合には進めるべきではないか、について議論を行いました。1 日目のディスカッションに続いて 2 日目は IVG 研究者などのゲストと意見交換を行い、IVG 研究の進め方はどうあるべきかについてまとめるという流れでした。最後に、この課題に対して自らの専門分野から貢献できることについて個人ワークでレポートを作成しました。

3 日間のスケジュールと内容は次の通りです。主に、グループワークを中心に進められました。

1 日目（9 月 24 日）

オリエンテーションと自己紹介

IVG 研究が進むことでもたらされる倫理的・法的・社会的課題を検討し、IVG 研究開発はどのように進められるべきか/どのような場合には進めるべきではないか、について議論し、ゲストへの質問を作成する

2 日目（9 月 25 日）

ゲスト講師の方々との議論

IVG 研究の進め方はどうあるべきかについて、グループで一定の結論を出す

3 日目（9 月 26 日）

IVG 研究の進め方はどうあるべきかについて、自らの専門分野から貢献できることについての個人ワーク

全体共有





京都大学の取り組み

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生みだすとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図 1）。

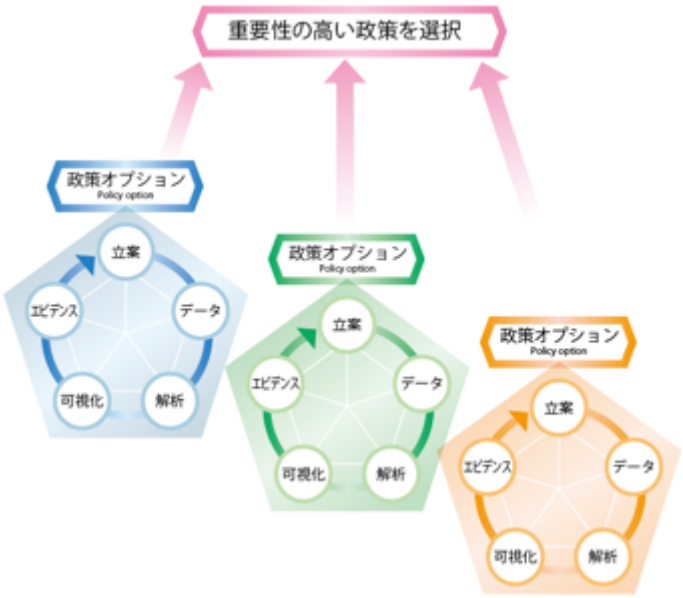


図 1　さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図 2）。

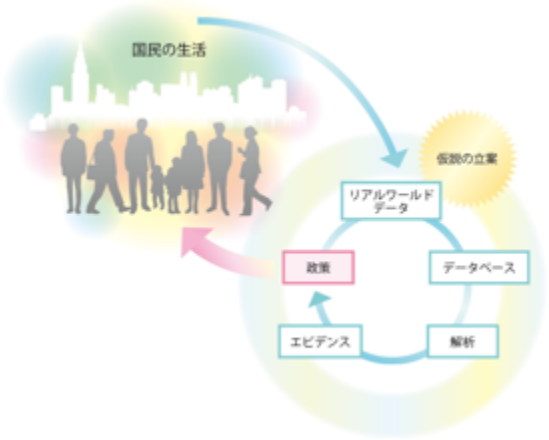


図 2　エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」概要

研究プロジェクト修了コース（修了要件 14 単位以上）

2025 年度　在籍者数の合計：5 人

履修登録者数：0 人（2025 年度は新規募集せず）

修了者見込み数：5 人

＊それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度
履修登録者数：7 人（所属研究科内訳　医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度
履修登録者数：7 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）
修了者数：7 人（進路内訳　政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）
修了者数：5 人（進路内訳　大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度
履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）
修了者数：6 人（進路内訳　公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

2017 年度
履修登録者数：9 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）
修了者数：6 人（進路内訳　公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

2018 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　医学研究科：2 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、農学研究科：1 人）
修了者数：4 人（進路内訳　博士課程在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2019 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：3 人、農学研究科：2 人、医学研究科：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳　政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2020 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　公共政策教育部：3 人、医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、文学研究科：1 人）
修了者数：3 人（進路内訳　政府・公的研究機関：1 人、博士課程在学中：2 人）

2021 年度
履修登録者数：3 人（所属研究科内訳　医学研究科：1 人、農学研究科：2 人）
修了者数：2 人（進路内訳　マスメディア：1 人、民間企業：1 人）

2022 年度
履修登録者数：2 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、公共政策教育部：1 人）
修了者数：3 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：1 人）

2023 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、公共政策大学院：1 人、情報学研究科：1 人、文学研究科：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳 博士課程在学中：2 人）

2024 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　医学研究科： 4 人、人間・環境学研究科： 1 人、農学研究科： 1 人）
修了者数:2 人(進路内訳 中央省庁:1 人、研究機関:1 人）

学際プログラム履修コース（修了要件 8 単位以上）

2025 年度　在籍者数の合計：17 人

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳　医学研究科：8 人、人間・環境学研究科：2 人、公共政策大学院： 1 人、経営管理大学院：1 人）

修了見込み者数：17 人

＊それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2019 年度
履修登録者数：4 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：2 人、農学研究科：1 人）
修了者数：1 人（進路内訳　博士課程在学中：1 人）

2020 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　医学研究科：3 人、情報学研究科：1 人、総合生存学館：1 人、農学研究科 1 人）
修了者数：4 人（進路内訳　政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、進学：1 人、不明：1 人）

2021 年度
履修登録者数：4 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：2 人、農学研究科：1 人、総合生存学館：1 人）
修了者数：7 人（進路内訳　中央省庁：1 人、シンクタンク：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：2 人、一貫制大学院在学中：1 人、博士課程進学：1 人）

2022 年度
履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 経営管理教育部：1 人、工学研究科：1 人、公共政策教育部：3 人、人間・環境学研究科：1 人）
修了者数：6 人（進路内訳 中央省庁：2 人、公務員：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中： 1 人、博士課程進学：1 人）

2023 年度
履修登録者数：2 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）
修了者数：4 人（進路内訳 公務員：1 人 シンクタンク：1 人、民間企業：2 人）

2024 年度
履修登録者数：3 人（所属研究科内訳　生命科学研究科：1 人、人間・環境学研究科： 1 人、文学研究科： 1 人）
修了者数： 6 人（進路内訳　公務員：1 人、公的研究機関： 1 人、民間企業： 3 人、博士課程進学： 1 名）

京都大学「政策のための科学」プログラム　開講科目一覧（2025 年度）

科目カテゴリー		授業科目名	主担当教員（研究科）	単位	学期
入門必修科目		現代社会と科学技術 B	川上 浩司（医学研究科）、他	2	後期
必修科目（※）		科学技術コミュニケーション演習	川上 浩司（医学研究科）、他	2	後期
連携必修科目（※）		研究プロジェクト	川上 浩司（医学研究科）、他	2	通年
選択科目：8 単位以上	選択科目Ⅰ：基軸科目群(1 科目以上選択)	政策のための研究方法論	カール・ベッカー（政策のための科学ユニット）	2	前期
		現代社会と科学技術 A	川上 浩司（医学研究科）、他	1	前期
		統計データ分析	北野 慎一（農学研究科）	2	前期
		共生社会環境論演習 3A	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	前期
		現代規範理論	森川 輝一(公共政策大学院)	2	前期
		科学技術イノベーション政策特別演習	川上 浩司（医学研究科）、他	1	夏期集中
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング	伊勢田 哲治（文学研究科）	2	後期
		公共政策論 I	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	後期
		共生社会環境論演習 3B	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	後期
	選択科目Ⅱ：イシュー科目群(1 科目以上選択)	FinTech 概論	岩下 直行（公共政策大学院）	2	前期
		デジタルガバメント論	岩下 直行（公共政策大学院）	2	前期
		情報社会論	大手 信人（情報学研究科）	2	前期
		地方自治法制	川崎 穂高（公共政策大学院）	2	前期
		食料・環境政策学	北野 慎一（農学研究科）	2	前期
		開発政治学	関山 健（総合生存学館）	2	前期
		疫学 I(疫学入門)	中山 建夫（医学研究科）	1	前期前半
		文献評価法	中山 建夫（医学研究科）	1	前期後半
		科学技術イノベーション政策総合演習	川上 浩司（医学研究科）、他	2	夏期集中
		健康情報学 I	中山 建夫（医学研究科）	2	後期
		国際環境政治学	関山 健（総合生存学館）	2	後期
		まちづくりとまち経営	吉田 恭（経営管理大学院）	2	後期
		医薬品の開発と評価	川上 浩司（医学研究科）	1	後期後半
		医薬政策・行政	川上 浩司（医学研究科）	1	後期前半

※ 研究プロジェクトコースのみ必修

京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術 A」（前期 木曜 1 限）、「現代社会と科学技術 B」（後期 木曜 4 限）

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。ユニット設立当初の 2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」「現代社会と科学技術」として開講し、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしてきました。2019 年度より体系的な学習を進めるために編制を見直し、「現代社会と科学技術 A」「現代社会と科学技術 B」と改めるとともに、前期は中央省庁の行政官をはじめとする実務家教員による講義を行っています。

また、講義終了後に学生から提出されるレポートについては、担当教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。これらのレポート及びコメントは、各回それぞれの講義を受講した学生で共有されており、同じ講義を受けた他の学生の視点、その視点に対する教員の評価を通して、学びを深める役割を果たしています。インタラクティブな講義、学生同士のディスカッション、講義後の学びにより、学生の幅広い政策に関する知識の習得と政策分析の能力の習得を目指します。

2025 年度の「現代社会と科学技術 A」と「現代社会と科学技術 B」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術 A」

第 1 回（2025 年 5 月 15 日）　宮野 公樹（京都大学 准教授）
大学における学問とは？分野融合・越境のダイナミクス
第 2 回（2025 年 5 月 22 日）　関山 健（京都大学 教授）
政策立案の現実と科学：元官僚の社会科学者による考察
第 3 回（2025 年 5 月 29 日）　杉谷 和哉（岩手県立大学 准教授）
日本における EBPM の展開と課題
第 4 回（2025 年 6 月 5 日）　丹羽 良太（京都大学 准教授）
科学技術・イノベーション政策等について
第 5 回（2025 年 6 月 12 日）　根津 純也（文部科学省）
科学技術・イノベーション政策の政策形成に関するダイナミクスについて
第 6 回（2025 年 6 月 19 日）　関根 仁博（産業技術総合研究所）
科学技術と社会
第 7 回（2025 年 6 月 26 日）　平川 秀幸（大阪大学 教授）
責任ある研究・イノベーションとは何か
第 8 回（2025 年 7 月 3 日）　岩下 直行（京都大学 教授）
ビットコインにおける非中央集権の理想と現実
第 9 回（2025 年 7 月 10 日）　全教員
研究プロジェクト中間発表会
第 10 回（2025 年 7 月 17 日）　白井 哲哉（京都大学 URA（上席））
科学技術コミュニケーションと URA

「現代社会と科学技術 B」

第 1 回（2025 年 10 月 2 日）　川上 浩司（京都大学 教授）

健康福祉政策と情報の利活用

第 2 回（2025 年 10 月 9 日）　カール・ベッカー（京都大学 特任教授）

現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 3 回（2025 年 10 月 16 日）　全教員

研究プロジェクト中間発表会

第 4 回（2025 年 10 月 23 日）　佐野 亘（京都大学 教授）

公共政策と民主主義

第 5 回（2025 年 10 月 30 日）　川崎 穂高（京都大学 特別教授）

少子高齢化時代の地方自治

第 6 回（2025 年 11 月 6 日）　祐野 恵（京都大学 特定准教授）

健康情報をめぐるポリティクス

第 7 回（2025 年 11 月 13 日）　吉田 恭（京都大学 教授）

まちづくり・地域づくりとソーシャル・キャピタル

第 8 回（2025 年 11 月 27 日）　伊勢田 哲治（京都大学 教授）

クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会

第 9 回（2025 年 12 月 4 日）　加藤 和人（大阪大学 教授）

ライフサイエンスの倫理とガバナンス

第 10 回（2025 年 12 月 11 日）　大手 信人（京都大学 教授）

森林の生態系サービスと政策

第 11 回（2025 年 12 月 18 日）　瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）

移植医療の社会的価値

第 12 回（2026 年 1 月 8 日）　北野 慎一（京都大学 教授）

食料・環境政策にかかる政策評価の方法と実践

第 13 回（2026 年 1 月 22 日）　宮野 公樹（京都大学 准教授）

振り返りワークショップ

第 14 回（2026 年 2 月 2 日）　中山 健夫（京都大学 教授）

医療の経済評価：その現状と課題

合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」（集中講義［夏］）

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つである SciREX サマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしてきました。この事前ワークショップは京都大学と一緒に実施しています。

事前ワークショップは、8 月 8 日（金）10:30～16:00 の日程で大阪大学と京都大学合同で実施しました。事前ワークショップの講師は、アトリエ・カプリスの岩田直樹さんと岩田花奈さんにお願いしました。サマーキャンプ本番でより良い対話や活動ができるようになることが目的です。今年度は「コワーキングスペースを作る（デザインする）」というテーマでグループワークを行いました。4～5 人のグループごとに話し合ってコンセプトデザインを考え、会場内にある備品を活用してスペースを作ってみました。グループごとに目指したことや工夫した点などを発表した後で、他のグループの考えたスペースを使ってみて、その感想や改善のアイディアなどをシェアしました。そこで出された意見などを通して、対話の場作りについて考えを深めました。





その後、9 月 5 日（金）からサマーキャンプに参加しました。9 月 5 日から 7 日にかけてのサマーキャンプは政策研究大学院大学で開催され、大阪大学からは学生 5 人、教職員 3 人と修了生 1 人（サブメンターとして）、京都大学からは学生 12 人と教職員 3 人、実行委員 4 人が参加しました。





サマーキャンプのプログラムに関しては、「SciREX 事業への参画（本冊子 37 ページ以降）」で詳しくご紹介しています。

「研究プロジェクト」（通年）

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術にかかわる現代の社会的課題の解決に資する研究テーマを各自が設定して、人文学・社会科学的な手法を用いた調査および分析を行います。12 月には、京都大学と合同で、研究成果合同発表会も開催します。

授業では、そのための基礎文献の紹介や研究の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、口頭発表会を実施しました。2025 年度の合同発表会は、2025 年 12 月 13 日に京都大学百年時計台記念館にて、大阪大学 1 人と京都大学 5 人の合計 6 人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2025 年度（口頭発表会：2025 年 12 月 13 日　京都大学百周年時計台記念館にて）

大阪大学

（1）高等学校「公共」における ELSI の視点を取り入れた授業実践研究―「AI の教育利用」を題材として―

京都大学

（1）こども食堂実践の持続可能性に関する研究：インタビュー調査

（2）児童への体験型歯科教育がもたらす行動変化：探索的質的研究

（3）日本のがん関連診療ガイドラインにおける患者・市民参画：スコーピングレビュー

（4）Life-Course に沿った ACP 実装の Evidence 整理：Scoping Review による現状把握と ALP への展望

（5）健康食品の利用と服薬アドヒアランスの関連

参考資料：研究プロジェクト　学生論文・口頭発表題名

2013 年度（口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学

（1）日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察

（2）多メディア時代の科学技術ジャーナリズム―「翻訳」、「批判」から「構築」へ―

2014 年度（口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

（1）「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編―エネルギーを中心として―

（2）科学技術とフィクション―人工子宮の現実化に寄せて―

（3）大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査―先行研究を参考に学生側の視点を探る―

（4）環境ラベルに関する一考察―NL マークを事例にあげて―

（5）福島第一原子力発電所事故における「市民測定」―福島市の事例をもとに―

（6）中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件―習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化―

（7）科学のイメージと PR―企業広告において「科学的である」とはどういうことか―

京都大学

（1）外科領域における医療技術評価 ―社会の理解のために―

（2）医療ツーリズムにおける政策提言 ―医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて―

（3）可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析

（4）トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床―応用への実現に関する調査研究―

（5）京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定―選択型実験による接近―

（6）社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
（7）虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化―レセプトデータベースを用いた疫学的研究―

2015 年度（口頭発表会：2016 年 2 月 13 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学
(1)技術者倫理教育の現状と展望―大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として―
(2)科学技術政策における外部性とその内部化―科学技術社会論と古典的自由主義の融合―
(3)日本における核融合研究と政策―歴史、現状、そして今後に向けて―
(4)科学的証拠の証拠規則の整備に向けて―DNA 型証拠と足利裁判―
(5)科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査―大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認―
京都大学
(1)講義タイトルの表現方法に関する分析―大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える―
(2)問題解決における現場地の重要性―自転車シャア事業を手掛かりに―
(3)診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望―新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に―
(4)食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
(5)栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016 年度（口頭発表会：2016 年 12 月 10 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学
（1）人工知能利用における受容態度と判断基準―若手研究者に対する探索的調査―
（2）専門職倫理における利益相反をめぐる論争―日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて―
（3）基礎研究における社会経済的評価について―物理分野を中心に―
（4）生活支援ロボット普及政策の分析と考察―ユーザー参加の視点から―
（5）市民参加の手続きにおける理論と実際の比較―過去の河川計画を例として―
（6）パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方―偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」―
京都大学
（1）日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
（2）口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
（3）農山村における福祉集住政策―奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に―
（4）自治体議員の研修に関する考察―評価グリッド法を用いた分析―
（5）行政の信頼の構造について
（6）先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

2017 年度（口頭発表会：2017 年 12 月 9 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学
（1）マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
（2）大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因―文献調査とインタビュー調査による探索的研究―
（3）クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討―因果関係の判定条件と規範的・価値的含意―
（4）雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理―現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて―
（5）科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査―サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について―
京都大学
（1）新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化―韓国の全国紙の社説を中心に―
（2）福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析―大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討―
（3）低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査―福島第一原子力発電所事故を例に―
（4）地域公共交通改革の事例分析－地域の持続的な移動手段確保に向けて－
（5）ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
（6）事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究―健康保険証発行に併せた一斉通知の実現可能性を探る―

2018 年度（口頭発表会：2018 年 12 月 8 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学
（1）大学におけるデュアルユース研究―「対話ツール」を利用した学生との議論―
（2）“個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査―兵庫県を事例として―

京都大学
（1）指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴―文献検索数を用いた記述研究―
（2）福祉政策による社会環境変化と精神障害者の QOL との関連―統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究―

（3）塩酸リトドリンの早産予防効果―データベースを用いた検討―
（4）市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討－サイエンスカフェの事例分析から－

2019 年度（口頭発表会：2019 年 12 月 14 日 京都大学芝蘭会館別館にて）

大阪大学
（1）日本の科学技術イノベーションに関する政策過程の検討―革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）を題材として―
（2）生命倫理への関心度の決定要因―情報収集行動を中心に―
（3）博士課程進学を選択する要因の調査―大阪大学大学院生命機能研究科における事例から―
（4）原子力工学科・専攻の改称による人材育成への影響―大阪大学大学院工学研究科を対象として―
京都大学
（1）京都市営バス路線ネットワークの最適化
（2）農業輸出における行政の役割と課題

2020 年度（口頭発表会：2020 年 12 月 12 日 オンラインにて）

大阪大学
（1）日本のスマートシティ関連事業における府省庁連携―中央府省庁と地方自治体の視点から―
（2）高度教養教育に関する学習動機の分析―大阪大学高度副プログラムにおける調査から―
（3）日本の科学技術イノベーションに関する政策過程―戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)を事例として―
（4）プラスチック資源循環の実現に向けた課題の検討―レジ袋有料化を事例として―
（5）新型コロナウイルス感染症(COVID-19)における台湾政府と市民の科学コミュニケーション―記者会見のインターネットライブ中継に伴う課題―
（6）科学に関する市民参加の課題と、その解決に向けた実践形態の模索―大阪 NO_2 一斉測定運動を事例に―
（7）要介護・要支援認定における医学的評価の在り方―主治医意見書を中心とした制度設計過程の分析―
京都大学
（1）外国人介護人材向けの介護のテキストの量的分析―介護現場での円滑なコミュニケーションを目指して―
（2）日本における女性の出産施設選択の嗜好―システマティックレビュー―
（3）多職種連携@精神科―質向上サイクルワーク―
（4）「見守り活動」への学生参加を増やせるか?―京都市と草津市の事例を対象に―
（5）農業大学校における環境保全型農業の実践についての提案―SDGs の達成を目指して―

2021 年度（口頭発表会：2021 年 12 月 4 日 オンラインにて）

大阪大学
（1）環境除染目的の日用品に対する日本のガバナンスの特徴と課題―除菌を騙る製品はなぜ流通するのか―
（2）スタートアップ・エコシステム拠点形成における大学の役割―大阪大学の取り組みを例に―
（3）宇宙科学・探査プロジェクトの政策過程―深宇宙探査技術実証機 $Destiny^{+}$計画を例に―
（4）中等教育の場で理科教員が教える地学の現状と支援に向けた提案
（5）化学系研究室における学生の学習過程の調査―正統的周辺参加論の枠組みから―
京都大学
（1）日本における都市部高齢者の Aging in Place 実現へ向けたボランティア活動奨励制度の検討
（2）日本の自粛政策の経済的コストと損失余命
（3）日本企業に就職した元留学生の直面する日本語コミュニケーション上の問題―中国人留学生を対象に―
（4）鉄道における時間帯別運賃政策の国際比較研究―日本版時間帯別運賃政策に向けて―

2022 年度（口頭発表会：2022 年 12 月 3 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学
（1）日本の理系女性研究者の増加を推進する政策―女子中高生の理系進路選択に関する取り組みに注目して―
（2）日本における博士後期課程学生への公的経済支援制度の史的変遷―日本学術振興会特別 研究員制度は失敗だったのか?―
京都大学
（1）林業大学校の現状と課題に基づく学生募集活動の提案―インターネット・SNS、オープンキャンパス、高校訪問に焦点を当てた分析―
（2）官民イノベーションプログラムの目的と実際の投資状況
（3）日本のパーム油依存を減らすための政策案

2023 年度（口頭発表会：2023 年 12 月 2 日 京都リサーチパークにて）

大阪大学
（1）チリにおける脳神経関連権（neurorights）に関する憲法改正の背景
（2）日本の博物館におけるデジタル・アーカイブ化が抱える課題―学芸員へのインタビュー調査を通じてー
（3）パーソナルデータ提供に関する課題検討―同意の必要性を問い直すー
（4）地域に即した陸上風力発電ゾーニングのための住民を巻き込んだ合意形成プロセスの検討
（5）海洋教育トランプの開発：海洋政策に関わる人材の育成に向けて
（6）新学習指導要領における統計の現状と数社横断的な授業の可能性の調査

（7）災害復興における行政の役割とその限界―岩手県沿岸部における防潮堤建設を事例にー
京都大学
（1）自治体によるレスパイト利用としての一時預かり活用促進

2024 年度（口頭発表会：2024 年 12 月 7 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学
（1）芸術作品から見た生業の崩壊と再生
（2）二次医療圏における医療情報連携の実態と包括的連携の課題
（3）HPV ワクチンの男性接種を巡る日本とフランスの国会議事録のフレーム分析
（4）新聞記事に見るマスメディアの量子技術に対する焦点の変遷
（5）博士人材のキャリアパス多様化を考える
（6）異なる専攻に所属する大学院生の生成 AI をめぐるディスコース分析
京都大学
（1）市町村産後ケア事業の実施状況と地域間格差の要因検討―ホームページデータを用いた探索的研究―
（2）労働世代がん生存者におけるがん診断後の離職状況と離職関連因子の検討

「研究プロジェクト」の発展

「研究プロジェクト」で取り組んだ内容をもとに学術論文として発表する取り組みも行われています。今年度は 1 件が学術誌に掲載されました。

三輪涼雅, 武田浩平. 2025. 「新聞記事に見るマスメディアの量子コンピュータに対する焦点の変遷」, 『Co＊Design NOTE』, 9: 1-14, 2025 年 11 月.

阪大・京大間の講師の相互派遣

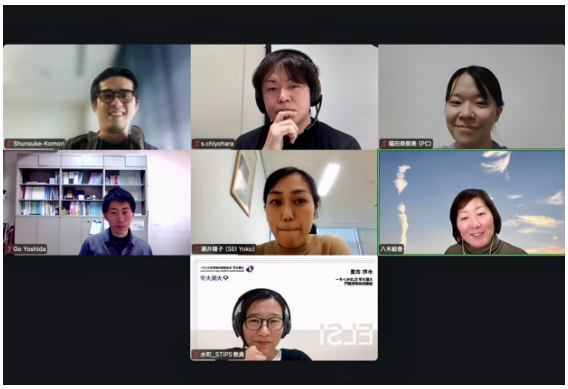
実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術 A」において、大阪大学の平川秀幸教授が、入門必修科目「現代社会と科学技術 B」において、大阪大学の加藤和人教授が講師を務めました。

また、京都大学の祐野特定准教授と小泉特定助教が、大阪大学で実施された「科学技術イノベーション政策総合演習」事前ワークショップに参加しました。

STiPS 修了生とのつながり

STiPS 修了生をゲスト講師に迎えた授業（大阪大学）

授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」のゲスト講師として、STiPS 修了生を招きました。現在、どのようなことに取り組んでいるのか、学生時代に学んだことがどのようにいきているのかといったことを現役生たちが知る機会になりました。



STiPS 修了生を取り上げたインタビュー記事の公開（大阪大学）

STiPS 修了生 16 人を取り上げたインタビュー記事も集録されている冊子「科学技術と社会をつなぐ人たち：人材育成プログラム『公共圏における科学技術政策』のあゆみ」を制作しました。



OBOG と現役生との交流（京都大学）

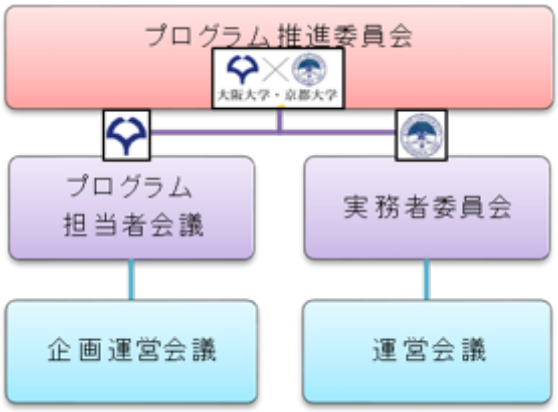
2025 年 5 月 8 日（木）17 時から実施した京都大学の 13 期生の受講開始のオリエンテーション後に、現役生と修了生の交流会を開催しました。また、2025 年 12 月 13 日（土）に開催した研究プロジェクトの合同発表にも、修了生が多数駆け付け、近況を報告しました。

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012 年より、毎年 3 回から 4 回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2025 年度は 10 月 29 日に実施しました。同会議では、両大学における教育研究プログラムの進捗状況などを共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプなどの拠点間合同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主に CO デザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザリー・ボード）」を設置していました。

カリキュラムの調整

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 21、うち新設科目数は 7 でしたが、2014 年度の開講科目数は 30、うち新たに追加した科目数は 9 となりました。2015 年度の開講科目数は 29、2016 年度の開講科目数は 32 でした。2017 年度には、4 学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は 36 になり、2018 年度の開講科目数は 37、2019 年度の開講科目数は 40、2020 年度の開講科目数は 40、2021 年度の開講科目数は 39、2022 年度の開講科目数は 35、2023 年度の開講科目数は 35、2024 年度の開講科目数は 32、2025 年度の開講科目数は 30 でした。

京都大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 22、うち新設科目数は 5 でしたが、2014 年度の開講科目数は 1 科目追加し 23 科目となり、2015 年度の開講科目数は 23、2016 年度の開講科目数は 25、2017 年度の開講科目数は 23、2018 年度の開講科目数は 27、そして、2019 年度の開講科目数は 28、2020 年度の開講科目数は 30、2021 年度の開講科目数は 27、2022 年度の開講科目数は 28、2023 年度の開講科目数は 26、そして 2024 年度の開講科目数は 27、2025 年度の開講科目数は 27 でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件 14 単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014 年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しています。これは、2013 年 3 月 27 日に両大学の総長名で締結された「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

- **【第 120 回 STiPS Handai 研究会】**
  放送のプロフェッショナルと社会を考える（2025 年度）
- 開催日：2025 年 11 月 4 日
- 実施形態／場所：NHK 大阪放送局
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

＊授業「メディアリテラシー」の一環として開催。

- **【第 121 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）第 1 回**
  新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）　福田奈那美さん
- 開催日：2025 年 12 月 16 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

＊授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- **【第 122 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）第 2 回**
  大阪大学国際機構 国際教育交流センター　瀬井陽子さん
- 開催日：2025 年 12 月 23 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

＊授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- **【第 123 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）第 3 回**
  ユニ・チャーム株式会社 Global 開発本部　小森駿介さん
- 開催日：2026 年 1 月 6 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

＊授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- **【第 124 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）第 4 回**
  株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）　千代原真哉さん
- 開催日：2026 年 1 月 13 日

- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

＊授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- **【第 125 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）第 5 回 高エネルギー加速器研究機構（KEK）　吉田剛さん**
- 開催日：2026 年 1 月 20 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

＊授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

サイエンスカフェ＠千里公民館

- **サイエンスカフェ＠千里公民館「どうなる！？未来の学校」**
- 開催日：2025 年 6 月 21 日
- 実施形態／場所：千里公民館 第 1 講座室（千里文化センター「コラボ」3 階）
- 主催：豊中市千里文化センター「コラボ」（地域連携課）
- 共催：STiPS、大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学社会技術共創研究センター

「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発

- **地域での「気候市民会議」開催に向けたセミナー＆勉強会「地球温暖化や地球環境問題をジブンゴトにする」**
- 日時：2025 年 10 月 21 日
- 実施形態／場所：大阪大学 中之島センター 5F
- 主催：環境省近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、STiPS、大阪大学社会技術共創研究センター、環境省 近畿地方環境事務所

＊科研費基盤研究（B）「『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発」（JP 23H01020）の一環として実施。

- **ワークショップ「気候市民会議の実施をめぐる課題と対応策を考える」**
- 日時：2025 年 12 月 11 日
- 実施形態／場所：大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 サイエンス・コモンズ内 DAICEL Studio
- 主催：大阪大学 CO デザインセンター
- 共催：STiPS、大阪大学社会技術共創研究センター

＊科研費基盤研究（B）「『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発」（JP 23H01020）の一環として実施。

その他

● 未来予測と専門知に関する研究会

● 日時：2025 年 5 月 20 日

● 実施形態／場所：京都大学吉田南キャンパス　人間・環境学研究科棟 333 教室

● 主催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット

● どうなる！？未来の食（「大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2025」内ブース）

● 開催日：2025 年 10 月 18 日

● 実施形態／場所：ららぽーと EXPOCITY　1F 光の広場

● 企画：大阪大学 社会技術共創研究センター（若林 魁人・水町 衣里）

● 協力：STiPS

＊本企画の一部は、ロッテ財団奨励研究助成「代替タンパク質をめぐるイメージ像と社会受容の相互作用の解明」（代表者：武田浩平）の支援を受けています。

● 未来の食を考える（「くらしかん祭り 2025」内企画）

● 開催日：2025 年 10 月 25 日

● 実施形態／場所：豊中市立生活情報センターくらしかん

● 企画：大阪大学 社会技術共創研究センター

● 協力：STiPS

＊本企画の一部は、ロッテ財団奨励研究助成「代替タンパク質をめぐるイメージ像と社会受容の相互作用の解明」（代表者：武田浩平）の支援を受けています。

● ELSI Forum2025「信頼できるデータ利活用のための『社会技術』：大阪・関西万博を事例として」

● 日時：2026 年 1 月 30 日

● 実施形態／場所：大阪大学中之島センター　5 階

● 主催：大阪大学 社会技術共創研究センター

● 共催：大阪大学 CO デザインセンター

● 協力：STiPS

3. SciREX 事業への参画

3. SciREX 事業への参画

サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2025 年度

実施日：2025 年 9 月 5 日から 7 日

会場：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教職員 2 人、修了生 1 人（サブメンターとして）、京都大学からは学生 13 人と教職員 3 人、実行委員 4 人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013 年度
実施日：2013 年 8 月 23 日から 25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）
会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）
主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）
学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2014 年度
実施日：2014 年 8 月 31 日から 9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）
会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）
主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

2015 年度
実施日：2015 年 8 月 21 日から 8 月 23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）
会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）
主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）
参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

2016 年度
実施日：2016 年 9 月 15 日から 17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）
会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）
主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）
参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

2017 年度
実施日：2017 年 8 月 20 日から 22 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）
会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学
参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人

2018 年度
実施日：2018 年 8 月 28 日から 30 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）
会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学
参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 4 人、京都大学からは学生 4 人と教員 5 人

2019 年度
実施日：2019 年 8 月 26 日から 28 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学
参加者数：大阪大学からは学生 14 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2020 年度（中止）
予定されていた実施日：2020 年 9 月 17 日から 19 日
予定されていた会場：国立オリンピック記念青少年総合センター
主催拠点：政策研究大学院大学、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2021 年度
実施日：2021 年 9 月 3 日から 5 日
会場：オンライン開催
主催拠点：政策研究大学院大学、一橋大学
参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 6 人、京都大学からは学生 8 人と教員 3 人

2022 年度
実施日：2022 年 9 月 2 日から 4 日
会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学、九州大学
参加者数：大阪大学からは学生 9 人と教職員 3 人、実行委員 1 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人、実行委員 2 人

2023 年度
実施日：2023 年 9 月 8 日から 10 日
会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学、九州大学
参加者数：大阪大学からは学生 9 人と教職員 3 人、実行委員 1 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人、実行委員 2 人

2024 年度
実施日：2024 年 9 月 13 日から 15 日
会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学
参加者数：大阪大学からは学生 11 人と教職員 3 人、京都大学からは学生 8 人と教職員 4 人、実行委員 1 人

2025 年度の体制

主催：文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課 政策科学推進室、SciREX 基盤的研究・人材育成拠点
企画・運営：SciREX サマーキャンプ 2025 実行委員会、政策研究大学院大学 SciREX センター

2025 年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

「分断してゆく社会に求められる未来との対話」

地球温暖化や世界の人口増加に対応した食糧やエネルギーの確保、新型感染症対策などの地球規模の諸課題が先鋭化してきている。地球規模課題解決には、国境を越えた協力や科学技術・イノベーションの適切な管理と積極的活用が不可欠であるが、国際的に協力して取り組むべき課題への対応で分断が生じつつある。

冷戦の終結後に国ごとの相違を超えて積み上げてきた国際秩序が危機に瀕し、覇権国家対民主主義国家の対立が進み、グローバルサウスの影響力も増大する中、各国の利害や考えは複雑に絡み合い、国家間分断はより際立っている。また、米国のトランプ政権の登場により、民主主義国の間でも米国とその他の国々や地域との分断も現実のものとなりつつある。

民主主義国家の内部においては、極右勢力が台頭するなど二極化や多極化が進み、国籍、人種、ジェンダー、政治的立場、宗教的信条や価値観、倫理観の分断が課題となっている。かつて「一億総中流」といわれた日本でも「経済格差の世代間連鎖」や「格差の構造的再生産」が教育・福祉・雇用等の領域を中心に注目されている。そこでは分断が進み、社会の寛容さも徐々に失われつつある。

しかし、このような分断が進みつつある状況こそ、望ましい未来について対話する極めて重要な機会と捉えるべきではないか。「分断」状況に直面し、我々はむしろ社会の多様性に対する認識をより一層高める経験をする。前提としてきた思想や価値観を離れ批判的に思考し、より多くのステークホルダーに思いを馳せて多様な視点から望ましい未来を語りたい。そのためには、現実の対立や分断を超えた柔軟な発想を促し、未来のあるべき姿について共通の認識を得て、これに向かって努力していく道筋を描くことが重要である。

望ましい未来－多様な人々を包摂する社会の実現－は、我々の思いと熱意の先にある。このサマーキャンプ 2025 で、科学技術・イノベーションの果たす役割に想いを馳せ、未来と、そして仲間と共に語り合おう。

学習のねらい（プログラムより）

・全拠点の学生や教員が一堂に参集し、「政策のための科学」の意義や多様性に関する認識を深める。
・多様なバックグラウンド・視点を持つ参加者と将来ビジョン・シナリオを議論することにより、科学技術イノベーションと経済、社会の関わりを大局的かつ多層的な視点から学ぶ。
・テーマごとに、政策担当者や実務家へのヒアリング等を行い、エビデンスに基づいた具体的な政策提言の構築を実践的に行う。





サマーキャンプのプログラム

事前学習会

2025 年 8 月 6 日（水）18:00～20:15
18：00～19：10　講義「STI 政策の概念とそのガバナンスについて」
　　城山 英明（東京大学公共政策大学院 大学院法学政治学研究科 教授）
19：15～19：45　グループディスカッション
19：45～20：15　グループ発表と講師のフィードバック

スケジュール

	9 月 5 日（金）	9 月 6 日（土）	9 月 7 日（日）
午前		9:00-10:30 グループワーク 10:30-11:00 中間発表会準備 11:00-12:00 中間発表会	10:00-11:30 最終発表会 11:30-12:30 昼食
午後	13:00-13:50 オリエンテーション 14:00-19:00 グループワーク	12:00-13:30 昼食／相談会 13:30-18:00 グループワーク	12:30-13:50 最終発表会（続き） 14:50-15:50 フィードバック・全体講評 15:50-16:00 閉会挨拶、アンケート

グループワーク（プログラムより）

J1 AI 時代の倫理と実世界共生

メンター：鹿野 祐介（大阪大学）、武田 浩平（大阪大学）

J2 AI 時代の倫理と実世界共生

メンター：ソン・ジュンウ(九州大学)

J3 人口減少社会における STI 人材政策

メンター：祐野 恵（京都大学）

J4 医療の社会実装を加速する政策デザイン

メンター：カール・ベッカー（京都大学）、小泉 志保（京都大学）

J5 気候変動のための国際的政策

メンター：高橋 一彰（政策研究大学院大学）

J6 イノベーションとユニバーサルデザイン

メンター：中澤 柊子（東京大学）

E1 Ethics in the age of AI and harmonious coexistence with AI

Mentor : Li Jiarong（Hitotsubashi University）

E2 Innovation and Universal Design

Mentor : Koji Kimita（Tokyo University）

他拠点への講師派遣

他拠点への講師派遣も積極的に行っています。大阪大学の平川秀幸教授が、2025 年 6 月 26 日に京都大学で実施された授業「現代社会と科学技術 A」、2025 年 7 月 12 日に GRIPS で実施された授業「科学技術イノベーション政策概論」、2025 年 11 月 15 日に九州大学で実施された授業「科学技術社会論概説」、2025 年 11 月 26 日に東京大学で実施された授業「事例研究（科学技術イノベーション政策研究）」の 1 回分を担当しました。また、大阪大学の加藤和人教授が 2025 年 12 月 4 日に京都大学で実施された「現代社会と科学技術 B」の 1 回分を担当しました。2025 年 8 月 8 日には、京都大学の祐野特定准教授と小泉特定助教が、大阪大学で実施された「科学技術イノベーション政策総合演習」事前ワークショップに参加しました。

研修などへの講師派遣

2025 年 12 月 22 日に令和 7（2025）年度 科学技術・イノベーション政策研修において、大阪大学の平川秀幸教授が「科学技術・イノベーションの社会的ガバナンス〈規範的転回〉の時代の STI ガバナンス～包摂と無知の観点から考える科学技術の〈望ましさ〉～」と題する講義を行いました。

2025 年 8 月 5 日に国立社会保障・人口問題研究所による研究会にて、京都大学の祐野恵特定准教授が「健康情報基盤整備を規定する要因－政策能力・EBPM・行政の専門性－」と題する話題提供を行いました。

2025 年 12 月に行われた科学技術イノベーション政策に関する行政官研修には、23 日に大阪大学の平川秀幸教授が、24 日には京都大学の祐野恵特定准教授が、講師として参加し、科学技術イノベーションと社会、ガバナンスについての講演と議論を行いました。

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様なテーマで研究会やワークショップなどを実施してきました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2025 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発

本研究では、日本でも自治体において実践がはじまりつつある気候市民会議の設計やムーブメントを下敷きとして、科学教育での蓄積を念頭に置きつつ、主に高校教育における「公共」への転用の可能性を模索し、科学教育の可能性の拡張を目指しています。その上で、民主主義に基づいた脱炭素社会への移行に資する教育プログラムを開発すること、これが本研究の目的です。 このようなプログラム開発をふまえ、脱炭素社会への転換に資する形で、気候市民会議を中心とした参加や熟議のしくみを活用する方法を提案することにより、社会的波及効果として、地方自治体の環境教育や脱炭素に向けた取り組みに知見を還元することも目指します。2025 年度は以下のイベントを行いました。

地域での「気候市民会議」開催に向けたセミナー＆勉強会「地球温暖化や地球環境問題をジブンゴトにする」

- タイトル：地域での「気候市民会議」開催に向けたセミナー＆勉強会「地球温暖化や地球環境問題をジブンゴトにする」
- 日時：2025 年 10 月 21 日（火）13:30〜16:30
- 実施形態／場所：大阪大学中之島センター 5F
- 主催：環境省近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、STiPS、大阪大学社会技術共創研究センター、環境省 近畿地方環境事務所

＊本ワークショップは、科研費基盤研究（B）「『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発」（JP 23H01020）の一環として実施。

気候市民会議とは、社会全体の縮図を構成するように一般から無作為で選出された人たちが、専門家からバランスの取れた情報提供を受けながら、数週間から数か月かけて気候変動対策について議論する市民会議です。

2019 年から欧州各国で行われるようになり、日本でも 2020 年に札幌で初めて試行された後、各地で実施が相次いでいます。しかしその開催は関東圏が中心であり、関西での開催実績や具体的な計画は見られません。

本セミナーは、2023 年から継続して開催したワークショップ「気候市民会議の多様な開催を考える」の延長上にあるもので、ワークショップを通じて気候市民会議の開催に興味を持った人々や、具体的な開催に向けた動きをしている方など、49 名の参加がありました。

CO デザインセンターウェブサイト（https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2025/001317.html）に開催レポートを掲載しています。

ワークショップ「気候市民会議の実施をめぐる課題と対応策を考える」

- タイトル：ワークショップ「気候市民会議の実施をめぐる課題と対応策を考える」
- 日時：2025 年 12 月 11 日（木）13:30〜18:00
- 実施形態／場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 サイエンス・コモンズ内 DAICEL Studio
- 主催：大阪大学 CO デザインセンター
- 共催：STiPS、大阪大学社会技術共創研究センター

＊本ワークショップは、科研費基盤研究（B）「『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発」（JP 23H01020）の一環として実施。

本ワークショップは、関西で気候市民会議開催の機運が比較的高まっている自治体や、開催のために様々な模索を行っている市民団体を中心に、少人数、招待制で開催されました。

気候市民会議の開催事例については、札幌市と厚木市からお話しいただきました。気候市民会議における対話や熟議の捉え方については、専業ファシリテーターの方からお話しいただきました。

参加者からの質疑やディスカッションでは、さまざまな話題が取り上げられ、閉会後にも意見交換や交流が行われていました。

5. 共進化実現プログラムの実施

5. 共進化実現プログラムの実施

2023 年度からは「共進化実現プログラム（第Ⅲフェーズ）」が始まりました。政策担当者と研究者とが対話をしながら研究課題を設定し、共に研究を進めるというものです。このうち 2 件に、STiPS 参画教員が関わっています。

ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発

研究課題名

ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発

プロジェクト期間

2023（R5）年 10 月～

プロジェクトメンバー

・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） *研究代表者

・木見田 康治（東京大学工学系研究科技術経営戦略学専攻 特任講師）

行政担当部署

文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課、文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室

取り組む課題

ミッション誘発的な新興・融合領域の戦略策定を促進するために、「注目すべき新興・融合研究領域の決定プロセスのメソッド化」を行い、決定の属人的バイアスを最小化し、決定内容の堅固さと包摂性、行政実務での実行可能性を保証するようなエビデンスの生成手法を確立すること。また、そのために、文部科学省内の分野所掌課、研究助成機関等との連携・共進化関係を構築すること。

プロジェクト概要

ミッション誘発型の新興・融合研究領域の決定プロセスにおいて広く利用可能で、決定における属人的バイアスが生じる可能性を最小化できるような、説明可能性・検証可能性・包摂性を備えた客観的エビデンスを生成するための大規模データ分析および超学際的エンゲージメントの手法を開発する。手法の開発とその効果の評価・検証を、文部科学省内の分野所掌課、研究助成機関等との連携・共進化の関係のもとで行う。

2025 年度の主たる研究成果

2024 年度に「サーキュラーエコノミー」を事例研究対象として実施した超学際エンゲージメント（一般市民・俯瞰的専門家・領域専門家それぞれを対象にした多層的小規模対話と研究者対象のアンケート調査）の成果をとりまとめ、協力いただいた文科省研究開発局環境エネルギー課にフィードバックし、意見交換を行った。その結果、研究開発プログラムを設計するうえで、さらに必要な参照情報等について理解が深まった。また、プロジェクトの最終成果として、大阪大学が担当した超学際的エンゲージメントの対話プロセスについて、簡便な実施マニュアルを年度末までに作成する予定である。

なお、共進化実現プログラム第 II フェーズで実施した: 「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」（代表：平川秀幸大阪大学教授、共同代表：木見田康治東京大学特任講師（当時））では、連携先の文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室において、ミッション志向型の研究開発戦略を策定するタイミング

であり、プロジェクトの成果をこの策定に反映させることができた。これに対して本プロジェクトでは、プロジェクト実施期間中に、環境エネルギー課において研究開発戦略等の策定予定がなかったため、プロジェクトの成果が活用されることはなかった。このことは、プロジェクトを実施するタイミングで行政側に研究成果を直接活かす明確な政策ニーズが存在しているという意味での「政策の窓（policy window）」が開いていることが、行政と研究の共進化の取り組みにとって非常に重要であることが痛感された経験であった。

科学技術政策における博士号を保有する人材活用に関する調査研究

研究課題名

科学技術政策における博士号を保有する人材活用に関する調査研究

プロジェクト期間

2023（R5）年 10 月～

プロジェクトメンバー

・祐野 恵（京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット 特定講師）*研究代表者
・佐野 亘（京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授）
・八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 教授）

行政担当部署

文部科学省大臣官房人事課

取り組む課題

第 6 期科学技術・イノベーション基本計画では、博士人材の活用が目標として掲げられ、中央省庁における取り組みも施策に挙げられている。行政官における博士人材の一層の活用を進めるには、昇任･昇格基準の見直しを含めた戦略的な人事配置の実現が必要となっており、これまでの慣行に依らない国家公務員の人事管理と制度の構築が政策課題となっている。そこで、本プロジェクトでは、博士号の取得に起因する仮説検証能力や分野専門性に焦点を当て、我が国の政策形成における博士人材の有用性を規定する要因を実証的に明らかにする。

プロジェクト概要

博士号の取得に起因する仮説検証能力や分野専門性に焦点を当て、我が国の政策形成における博士人材の有用性を規定する要因を実証的に明らかにする。Ⅰ.採用時の評価における参照情報の提示、Ⅱ.博士人材の有用性に関するエビデンスの提示、Ⅲ. 博士人材の人材育成における特徴の提示を目標に掲げ、入省前及び入省後の行政官の技能と OJT のあり方を含めた環境要因について分析する。

2025 年度の主たる研究成果

2025 年度においては、文部科学省研究 3 局の博士人材を対象としたインタビュー調査、オーストラリア政府の博士人材を対象としたインタビュー調査、日台豪の人事制度比較を中心に研究を推進した。まず、インタビュー調査については、2025 年 12 月に、研究 3 局の博士人材 8 名に対して半構造化インタビュー調査を実施し、その結果を分析した。その結果、博士人材は、専門知識よりも分野横断的なスキル（①速習・適応力、②課題設定・探求能力、③姿勢態度・レジリエンス、④数的リテラシー、⑤語学力、⑥アカデミアの経験知）を活用していると評価された。くわえて、特に海外アクターとの交渉において、学位は社会的ラベルとしてコミュニケーションを助けていることが明らかになった。次に、オーストラリ

ア政府の博士人材を対象としたインタビュー調査では、新人職員、中堅職員、ベテラン職員に相当する 3 名の協力者を得た。インタビュー調査の結果、開放型の任用制度を採る同国でも、博士学位の専門性は職員の業務と必ずしも一致しておらず、ジョブ型雇用によって博士の分野専門性の活用が約束されているとは言えない状況であった。その一方で、博士課程で培ったコミュニケーション力や課題発見能力は、いずれの調査対象者の業務でも有用性が認識されていた。また、台湾の人事システムについても、開放型の人事制度が採用されているものの、分野専門性による博士の活用がなされているとは言えない状況であった。

以上の研究結果について、安藤加菜子・祐野恵. 2026.『行政部門における博士人材の専門性：入省前の学位取得経験の影響』として、オープンジャーナルの F1000Research に採択された。また、2025 年日本公共政策学会研究大会、EGPA2025 にて研究報告を実施した。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

本拠点 STiPS は、関西ネットワークの拡大を目的とした研究会やイベントを開催しています。2025 年度は、科学技術コミュニケーション分野の第一線で活躍する専門家を招いての研究会（シリーズの趣旨は後述）を開催し、新しいネットワークの開拓にも努めました。

STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

中でも、セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」は、将来的に専門知と社会をつなぐ仕事に関心のある学生を念頭に置き、実務経験者によるゲストレクチャーを含む、参加者同士のディスカッションを中心に進行します。具体的には、科学技術コミュニケーションとよばれる分野の第一線で活躍するゲスト講師（実践的研究者、デザイナー、ファシリテーター、ジャーナリスト、政策担当者、弁護士、弁理士、シンクタンク研究者等）を招き、それぞれがどのようにキャリアを形成してきたのか、特に専門知と社会をつなぐためにどのような仕事をしているのかについてお話を伺いながら、参加者も交えて議論をしました。

第 120 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：放送のプロフェッショナルと社会を考える（2025 年度）
- ゲスト：小磯 真太郎（NHK 大阪放送局 経営管理センター企画部）、藤島 新也 記者（NHK 大阪放送局 コンテンツセンター第 2 部）、佐藤 玲衣 ディレクター（NHK 大阪放送局 コンテンツセンター第 3 部ドラマ班）、篠塚 茉莉花 ディレクター（NHK 大阪放送局 コンテンツセンター第 3 部福祉班）
- 日時：2025 年 11 月 4 日（火）10:00〜18:00
- 実施形態／場所：NHK 大阪放送局
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター



2025 年 11 月 4 日（火）に、STiPS Handai 研究会「放送のプロフェッショナルと社会を考える（2025 年度）」を開催しました（集中講義「メディアリテラシー」の一環として開催）。NHK 大阪放送局の見学と、番組制作者からの講義などを行い、24 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

公共メディアの役割について、放送法に規定されている NHK の目的について、また、公共放送の役割について説明を受けた後、放送会館を見学しました。

加えて、番組制作の第一線で活躍されている方のお話を伺い、参加者も交えて議論しました。

番組の企画を考えるところから、実際の制作現場までのプロセスを追体験できる 1 日になりました。送り手の立場になってみないと分からない視点を踏まえて、参加者それぞれが「公共」や「放送」についての考えを深めることができたのではないでしょうか。

第 121 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬） #1
- ゲスト：福田 奈那美（国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）法務部）
- 日時：2025 年 12 月 16 日（火）15:10〜16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター



2025 年 12 月 16 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）」がスタートしました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催)。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 28 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

この回のゲストは、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO） 福田奈那美さんでした。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」を履修していた福田さんが阪大を修了して、NEDO に入構した後、どのようなお仕事に取り組んできたのかを、楽しく聞くことができました。

第 122 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬） #2
- ゲスト：瀬井 陽子（大阪大学国際機構 国際教育交流センター 特任助教）
- 日時：2025 年 12 月 23 日（火）15:10〜16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

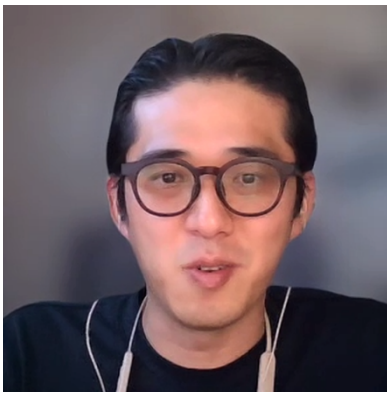


科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）」第 2 回を、2025 年 12 月 23 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 18 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

この回のゲストは、大阪大学国際機構 国際教育交流センター　瀬井陽子さん。瀬井さんが取り組んでいる日本語学習支援や、日本語学習支援活動を行うボランティアの養成に関わる活動についてのお話を伺いました。

第 123 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬） #3
- ゲスト：小森 駿介（ユニ・チャーム株式会社 Global 開発本部 開発購買部）
- 日時：2026 年 1 月 6 日（火）15:10〜16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター



科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）」第 3 回を、2026 年 1 月 6 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 20 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

この回のゲストは、ユニ・チャーム株式会社 Global 開発本部　小森駿介さん。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」が立ち上がった時に在籍していた学生の 1 人が小森さんでした。今の会社で、資材の開発や調達という仕事に関わる中での意思決定の仕方や、民間企業の中での異なる専門性を「つなぐ」ことについてお話を伺いました。

第 124 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬） #4
- ゲスト：千代原 真哉（株式会社 国際電気通信基礎技術研究所（ATR） 脳情報通信総合研究所 研究員）
- 日時：2026 年 1 月 13 日（火）15:10〜16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター



科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）」第 4 回を、2026 年 1 月 13 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 22 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

この回は、株式会社 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）千代原真哉さんをゲストにお迎えしました。理学療法士としてお仕事をされていた時に見えていた世界について、生命機能研究科での研究を進めながら STiPS と出会って見えてきた世界について、お話をしていただきました。「技術と社会のあいだで考え続けている一人」とご自身のことをおっしゃっていた千代原さんでした。

第 125 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬） #5
- ゲスト：吉田 剛（高エネルギー加速器研究機構（KEK） 放射線科学センター 准教授）
- 日時：2026 年 1 月 20 日（火）15:10〜16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター



科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）」第 5 回を、2026 年 1 月 20 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 21 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

「つなぐ人たちの働き方（2025 年度冬）」の最終回は、高エネルギー加速器研究機構（KEK）放射線科学センター 吉田剛さんをお迎えしました。現在吉田さんが従事している大型加速器施設の放射線管理業務および、放射線安全や管理に関する研究についてのお話だけでなく、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」を履修していた時に取り組んだ研究プロジェクトについても紹介してくださいました。

サイエンスカフェ＠千里公民館

2017 年より、豊中市立千里公民館と共同でサイエンスカフェを開催しています。2019 年以降は、学生もグループファシリテーターとして参加し、参加者同士の対話をサポートしています。

サイエンスカフェ＠千里公民館　第 23 回

- タイトル：どうなる！？未来の学校
- 進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
- コメンテーター：加納 圭（滋賀大学教育学部 教授）、後藤 崇志（大阪大学大学院人間科学研究科 准教授）、村上 正行（大阪大学全学教育推進機構 教授）、若林 魁人（大阪大学社会技術共創研究センター 特任研究員）
- 日時：2025 年 6 月 21 日（土）14：00〜16：00
- 実施形態／場所：千里公民館 第 1 講座室（千里文化センター「コラボ」3 階）
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：STiPS、大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター



2025 年 6 月 21 日（土）に、サイエンスカフェ＠千里公民館「どうなる！？未来の学校」を開催しました。今回のサイエンスカフェには、学生も含むさまざまな年代の方 14 人（イベント運営の関係者を除く）がご参加くださいました。赤ちゃん連れのご家族や、スタッフの子どもたちも参加していて、なごやかな雰囲気となりました。

今回のテーマは「どうなる！？未来の学校」。近年、1 人 1 台の端末を使っての学習が行われたり、教育データを利活用して個別最適化された学びを実現しようという動きが見られたりするなど、新しい技術が学校教育の現場に導入されつつあります。こうした新しい技術と学校教育について、参加者同士で意見を出し合いながら考えてみました。

今回、対話のお手伝いをしたのは、CO デザインセンターが春学期に開講していた科目「ファシリテーション入門」でファシリテーションスキルについて学んだ受講生たちでした。昨年度までに受講していた学生も参加していました。

CO デザインセンターのウェブサイト（https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2025/001313.html）に開催レポートを掲載しています。

その他

- タイトル：未来予測と専門知に関する研究会
- 報告者：フリップ・E・テトロック（ペンシルベニア大学）
- 日時：2025 年 5 月 20 日（火）16:30〜18:00
- 実施形態／場所：京都大学吉田南キャンパス　人間・環境学研究科棟 333 教室
- 主催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット

『超予測力：不確実な時代の先を読む 10 か条』や『専門家の政治予測』の著者である、ペンシルベニア大学のテトロック教授を迎えて、研究会を実施しました。

心理学を専門とするテトロック教授は、20 年にわたって専門家と市民を対象に大規模調査を実施し、その結果を用いた分析によって、専門家であっても未来予測の精度が高いとは限らない点を指摘しました。未来予測の精度は、慎重なものの考え方、旺盛な知的好奇心、自己を批判的に見る思考スタイル、多様な視点からの予測の検討といった共通点によって説明される一方で、その分野の専門性を有するかどうは関係しないことがわかっています。

研究会には、京都大学や大阪大学の研究者にくわえて、一般からの参加も多く、活発な質疑が交わされました。

- タイトル：どうなる！？未来の食（「大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2025」内ブース）
- パーソナリティ：若林 魁人（大阪大学社会技術共創研究センター）
- ゲスト：赤坂 亮太（大阪大学社会技術共創研究センター）、井出 和希（大阪大学感染症総合教育研究拠点）、鹿野 祐介（大阪大学 CO デザインセンター）、村中 俊哉（大阪大学 先導的学際研究機構）、平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター）、武田 浩平（大阪大学 CO デザインセンター）
- 日時：2025 年 10 月 18 日（土）11:00〜17:00
- 実施形態／場所：ららぽーと EXPOCITY　1F 光の広場
- 企画：大阪大学 社会技術共創研究センター（若林 魁人・水町 衣里）
- 協力：STiPS、大阪大学 先導的学際機構（OTRI）産業イニシアティブ研究部門

＊本企画の一部は、ロッテ財団奨励研究助成「代替タンパク質をめぐるイメージ像と社会受容の相互作用の解明」（代表者：武田浩平）の支援を受けています。

2025 年 10 月 18 日に開催された「大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2025」（主催：大阪大学）に、「どうなる！？未来の食」を出展しました。

ゲノム編集、代替タンパクなど、食にまつわる新しい科学や技術が日々登場しています。このブースでは、食にまつわる具体的な事例をポスターなどで紹介しつつ、来場者のみなさんからは、思い出したエピソード、みなさんが感じた「ドキ

ドキ」や「モヤモヤ」をお寄せいただきました。そして、集まった“お便り”を元に、ゲストを迎えつつ、ラジオ番組風のトークセッションを行いました。
当日は、担当したブースに 200 名を超える方にお立ち寄りいただきました。



大阪大学 社会技術共創研究センターのウェブサイト（https://elsi.osaka-u.ac.jp/contributions/4342）に開催レポートが掲載されています。

- タイトル：未来の食を考える（「くらしかん祭り 2025」内企画）
- 日時：2025 年 10 月 25 日（土）10:00～15:00
- 実施形態／場所：豊中市立生活情報センターくらしかん
- 企画：大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：STiPS

＊本企画の一部は、ロッテ財団奨励研究助成「代替タンパク質をめぐるイメージ像と社会受容の相互作用の解明」（代表者：武田浩平）の支援を受けています。

2025 年 10 月 25 日（土）、豊中市立生活情報センターくらしかんにおいて開催された「くらしかん祭り 2025」では、担当したブースには約 80 名の方に、お立ち寄りいただきました。

「くらしかん祭り」は、市民活動の活性化やネットワークづくりを促進するため、また、消費者問題などへの興味関心を持つきっかけを作るために、例年秋に、豊中市立生活情報センターくらしかんにおいて開催されているイベントです。この日は、くらしかん 1 階奥の、喫茶くらしかんのカウンターをお借りして、企画「未来の食を考える」を実施しました。



わたしたちがブースに用意をしていたのは、
・未来の食について考えを巡らすことのできるポスター
・ランチョンマットのような情報提供資料
・みなさんの意見や感想を貼り付けてもらうボード
です。
スタンプラリーのついでに立ち寄ってくれた子どもたちや、地元で生産された野菜の販売コーナーを目指して来場された方などが、企画「未来の食を考える」にも参加をしてくださいました。

大阪大学 社会技術共創研究センターのウェブサイト（https://elsi.osaka-u.ac.jp/contributions/4338）に開催レポートが掲載されています。

- タイトル：ELSI Forum 2025「信頼できるデータ利活用のための『社会技術』：大阪・関西万博を事例として」
- 日時：2026 年 1 月 30 日（土）13:30〜17:00
- 実施形態／場所：大阪大学中之島センター 5F
- 主催：大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学 CO デザインセンター
- 後援：STiPS



2026 年 1 月 30 日に、ELSI Forum 2025「信頼できるデータ利活用のための『社会技術』：大阪・関西万博を事例として」を開催しました。

ELSI Forum 2025 のテーマは、「信頼できるデータ利活用のための『社会技術』」です。当日は 39 名が会場に集い、2025 年 4 月から 10 月まで開催されていた、2025 年日本国際博覧会（大阪・関西万博）を振り返りながら、データ利活用はどのような原則やルールに基づいて実施されるべきかを考えました。

大阪大学 社会技術共創研究センターのウェブサイト（https://elsi.osaka-u.ac.jp/contributions/4349）に開催レポートが掲載されています。

7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

国際連携

教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2025 年度には、以下の活動を行うことができました。

Ⅰ）PIT-UN（公益技術大学間ネットワーク)への参加

欧米諸国の大学が参加する Public Interest Technology University Network (PIT-UN: 公益技術大学間ネットワーク)へ STiPS として継続して参加しました。

Ⅱ）教育・研究面での新たな連携の試み

PCST（国際科学技術コミュニケーション学会）代表などが参加した国際交流イベント「日本語で Meet the PCST―日本の科学コミュニケーションを世界へ」（主催：科学コミュニケーション研究会）にて、平川秀幸教授が、STiPS の活動や教育プログラムについて話題提供を行いました。

海外調査及び発表等

2025 年 8 月 26 日から、祐野恵特定准教授が、スコットランドのグラスゴー大学で行われたヨーロッパ行政学会（The European Group for Public Administration）に参加し、中央省庁における博士人材の活用をテーマとする研究報告を行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2025 年度の STiPS 参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、（本冊子 32 ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

- **小林傳司**. 2026. 「序言」, JST RISTEX「ゲノム倫理」研究会編『ゲノムと社会―つくる生命、ゆれる価値観―』, 共同文化社, 1-4, 2026 年 1 月. 著書
- **小林傳司**. 2026. 「社会技術開発研究センター（RISTEX）とは」, JST RISTEX「ゲノム倫理」研究会編『ゲノムと社会―つくる生命、ゆれる価値観―』, 共同文化社, 10-29, 2026 年 1 月. 著書
- 矢守克也, **八木絵香**. 2025.「第 1 章　オープンサイエンスの諸相――天変地異をめぐるオープンサイエンスのカタチ」, 矢守克也編著. 『天変地異のオープンサイエンス』, 新曜社, 17-34, 2025 年 4 月. 著書
- **八木絵香**. 2025.「第 4 章　気候変動問題とオープンサイエンス――市民とともにつくる政策にむけて」, 矢守克也編著. 『天変地異のオープンサイエンス』, 新曜社, 83-109, 2025 年 4 月. 著書
- **八木絵香**, **鹿野祐介**. 2025. 「つなぐ人材を育てる―ELSI が切り拓く分離融合の新たな地平―」, 『IDE 現代の高等教育』, 672: 43-47, 2025 年 7 月. 寄稿
- 山田素行, 榎原毅, 大場恭子, 鳥居塚崇, **八木絵香**, 吉武良治. 2025.「人間工学領域における科学コミュニケーションの展開」, 『人間工学』, 61(4): 252-261, 2025 年 9 月. 研究論文
- Aiko Nishikida, Chie Ezaki, **Toshiya Tsujita**, eds. *"Fragile Stability" as a Political Background of October 7: Current and Foreseeable Issues in the Israeli-Palestinian conflict*, Singapore: Springer, 2025 年 4 月. 編著
- 堀啓子, **松村悠子**, 芳賀智宏, 齋藤智美. 2025. 「Hogg Eco-Anxiety Scale を用いた日本におけるエコ不安の実態調査と要因分析」, 『土木学会論文集』, 81(26), 2025 年 11 月. 研究論文
- カテライ・アメリア, **鹿野祐介**, 標葉隆馬 編. 2025. 『ELSI 入門：先端科学技術と社会の諸相』, 丸善出版, 2025 年 4 月. 共編著
- 井出和希, 白井哲哉, **水町衣里**, **鹿野祐介**. 2025. 「分野横断の芽を育むために重要な ELSI/RRI―URA からみた課題＆ニーズのマップ化―」, 『RMAN-J Journal』, 3: 22-24, 2025 年 10 月. 論文
- 坪井祥吾, **鹿野祐介**, 小田切裕史, 本間哲. 2025. 「<書評>『分析形而上学の最前線 --人、運命、死、真理』」, 『Contemporary and Applied Philosophy』, 16: 480-519, 2025 年 12 月. 論文
- **鹿野祐介**. 2026. 「倫理の〈見え方〉と協力的討論――書評　伊勢田哲治『倫理思考トレーニング』」, 『豊田工業大学ディスカッション・ペーパー』, 38 巻: 1-16, 2026 年 2 月（予定）, 論文
- **神里達博**. 2025. 「(月刊安心新聞 plus) トランプ支持勢力つなぐ「終末論」とは　テック右派も宗教右派にも」, 『朝日新聞』, 5 月 1 日朝刊, 2025 年 5 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025. 「(月刊安心新聞 plus)「天災は忘れた頃に…」　常に心に、地震リスクと防災」, 『朝日新聞』, 5 月 28 日朝刊, 2025 年 5 月. 寄稿

- **神里達博**. 2025.「(月刊安心新聞 plus) イラン、ガザ、ウクライナ…戦争の不安拡大　本質見極める心の余裕を」,『朝日新聞』, 6 月 25 日朝刊, 2025 年 6 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025.「(月刊安心新聞 plus) ポピュリズムが映す人々の切実さ　エリート排除より参加型民主主義を」,『朝日新聞』, 7 月 30 日朝刊, 2025 年 7 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025.「(月刊安心新聞 plus) 学童疎開、父の遺品に思う　「あの戦争」の歴史受け継ぐ」,『朝日新聞』, 8 月 27 日朝刊, 2025 年 8 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025.「(月刊安心新聞 plus) 映画「イグ・ノーベル賞が伝える「科学のもう一つの顔」　有用性だけでなく」,『朝日新聞』,10 月 1 日朝刊, 2025 年 10 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025.「(月刊安心新聞 plus) 警告されてきた老朽化問題、現実に　インフラ、資源をどう配分」,『朝日新聞』, 10 月 29 日朝刊, 2025 年 10 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025.「SEKAI Review of Books 「テクノロジー左派」復権へのマニフェスト[オードリー・タン、E・グレン・ワイル、プルラリティコミュニティ(著) 山形浩生(訳)]『PLURALITY 対立を創造に変える、協働テクノロジーと民主主義の未来』」,『世界』, 999: 262-264, 2025 年 11 月. 寄稿
- **神里達博**. 2025.「(月刊安心新聞 plus) 日本は熊、中国は鞠・税、台湾は罷　「今年の漢字」で知る隣人の存在」,『朝日新聞』, 12 月 24 日朝刊, 2025 年 12 月. 寄稿
- **神里達博**. 2026.「(月刊安心新聞 plus) 大学での学びは「消費」ではない　学生の AI 利用に思う「知」の意義」,『朝日新聞』, 1 月 28 日朝刊, 2026 年 1 月. 寄稿
- 永井孝志, 村上道夫, 小野恭子, **岸本充生**. 2025.『世界は基準値でできている : 未知のリスクにどう向き合うか』, 2025 年 6 月. 著書
- **岸本充生**. 2025.「生成 AI が多文化共生社会に与える影響」,『日立財団グローバル ソサエティ レビュー』, 2025 年 6 月. 寄稿
- 工藤郁子, 長門裕介, **岸本充生**. 2025.「Nintendo Switch 2 発売戦略の日米比較：経済・倫理・社会の観点から」,『ELSI NOTE』, 55: 1-31, 2025 年 7 月. 研究論文
- 若林魁人, **岸本充生**. 2025.「生成 AI の教育への導入の ELSI（倫理的・法的・社会的課題）を考えるための国内外ケース集」,『ELSI NOTE』, 57: 1-22, 2025 年 8 月. 研究論文
- 工藤郁子, 太田叡, 齋藤良和, **岸本充生**. 2025.「企業の公共的活動と価値の接続：Mercari Education を例として」,『ELSI NOTE』, 58: 1-23, 2025 年 8 月. 研究論文
- 榎本啄杜, 久保田唯史, 清水右郷, 野内玲, 丸山隆一, 井出和希, **岸本充生,** 長門裕介. 2025.「メタサイエンスって結局何なんですか？：ある 12 の問いからの再考」,『ELSI NOTE』, 59: 1-36, 2025 年 8 月. 研究論文
- 辻村千尋, 山口あをい, 岡村和男, **岸本充生**. 2025.「AI 時代のパーソナルデータ利活用の勘どころ」,『ELSI NOTE』, 63: 1-19, 2025 年 10 月. 研究論文
- **岸本充生**. 2025.「新しいアイデアの社会実装として見た大阪・関西万博 : 顕在化したギャップを何がつないだのか」,『ELSI NOTE』, 64: 1-23, 2025 年 11 月. 研究論文
- **岸本充生**. 2025.「大阪・関西万博における責任あるデータ利活用の試みとしての“VPIA”: Value and Privacy Impact Assessment」,『ELSI NOTE』, 65: 1-34, 2025 年 12 月. 研究論文
- **Atsuo Kishimoto**. 2025. “Ethical, Legal, and Social Issues in the Use of Generative Artificial Intelligence in Education”, Information and Technology in Education and Learning, 5(1): Inv-p002, 2025 年 12 月. 研究論文
- **岸本充生**. 2026.「同意は手段であり、目的ではないーリスクに基づくアプローチの必要性ー」, JST RISTEX「ゲノム倫理」研究会編『ゲノムと社会―つくる生命、ゆれる価値観―』, 共同文化社, 66-77, 2026 年 1 月. 著書

学会発表等

- **八木絵香**. 2025. 「気候市民会議の開催をめぐる多様性の模索―大阪いばらき気候市民会議を例に―」, 科学技術社会論学会 第 24 回年次研究大会(水戸市, 常盤大学), 2025 年 12 月 7 日. オーガナイズドセッション発表
- **八木絵香**. 2025. 「ケアと科学技術」, 科学技術社会論学会 第 24 回年次研究大会(水戸市, 常盤大学), 2025 年 12 月 7 日. 座長
- Xixi Zhang, Natsuki Tsujita, **Toshiya Tsujita**, Yosuke Otani, Goro Yamazaki. 2025. "Fostering Interdisciplinary Talent through Cross-Disciplinary Project-Based Learning: A Case Study from a Japanese National University," The 6th Barcelona Conference on Education (BCE2025)（オンライン）, 2025 年 9 月 30 日. 発表
- **辻田俊哉**. 2025. 「非対称紛争の終わらせ方―イスラエル・ガザ紛争を中心に」, 日本国際政治学会 2025 年度研究大会（神戸市, 神戸国際会議場）, 2025 年 10 月 19 日. 発表
- **Toshiya Tsujita**. 2025. "Ceasefire in Gaza: Governance, Security, and Regional Implications," Second Japan–Middle East Strategic Dialogue (Amman, Jordan), 2025 年 11 月 20 日. 発表, パネリスト
- **松村悠子**. 2025. 「島嶼地域における地域主体の生態系保全活動の可視化に向けて」, 対馬未来フォーラム(対馬市, 対馬市交流センター), 2025 年 12 月 21 日. ポスター発表
- **松村悠子**. 2026. 「離島における廃棄物処理と地域社会の問題（Waste Management and Community Issues on Japanese Offshore Islands)」, GSRFORUM2026 (横浜市,横浜国立大学), 2026 年 1 月 27 日. 口頭発表
- **鹿野祐介**. 2025. 「書評―伊勢田哲治著『倫理思考トレーニング』―」, 京都生命倫理研究会（京都市, 京都女子大学）, 2025 年 12 月 20 日. 発表
- **岸本充生**. 2025.「AI を活用した EdTech の ELSI 事例および論点についての報告」, 2025 年度人工知能学会全国大会 (第 39 回）万博関連企画「AI を活用した教育の未来」（大阪市, グランキューブ大阪／オンライン）, 2025 年 5 月 29 日 オーガナイズドセッション発表.
- **岸本充生**. 2025. 「防潮堤の高さをめぐる「科学」と「社会」」, 安全工学シンポジウム 2025（日本学術会議／オンライン）, 2025 年 6 月 26 日. オーガナイズドセッション発表
- **岸本充生**. 2025.「AI エージェントの普及に伴うリスクの概論」, 第 38 回日本リスク学会年次大会 企画セッション「AI エージェント」時代のリスクとガバナンスにおける論点整理（吹田市, 大阪大学）, 2025 年 11 月 8 日. オーガナイズドセッション発表
- 大嵩豪朗, 北野立, 若宮祥裕, 上條かおる, **岸本充生**, 山本龍彦. 2025. 「大阪・関西万博におけるデータ利活用の実践～TRUST5 原則と VPIA 手法で実現するデータガバナンス～」, 第 110 回電子化知的財産・社会基盤・第 61 回セキュリティ心理学とトラスト・第 111 回コンピュータセキュリティ合同研究発表会（新潟市, 新潟大学）, 2025 年 12 月 2 日. 発表

社会活動（講演会・展示会などアウトリーチ活動等）

- **小林傳司**. 2025. 講演「日本学術会議問題とは何だったのか」, 日本科学ジャーナリスト会議(オンライン), 2025 年 5 月 16 日.
- **小林傳司**. 2025. 講演「科学技術・イノベーションと社会：ELSI/RRI を考える意義」, AI・ロボット活用における院理的・法的・社会的課題（ELSI）勉強会：ユカイ工学株式会社主催（オンライン), 2025 年 6 月 4 日.
- **小林傳司**. 2025. 講演「日本学術会議問題とは何だったのか」, 東京大学科哲の会（東京, 東京大学駒場キャンパス）, 2025 年 9 月 27 日.

■ **小林傳司**. 2025. コメント掲載「『バナナのたたき売りじゃない』学術会議の任命拒否で断った打診」, 『朝日新聞』10 月 1 日電子版, 2025 年 10 月 1 日.

■ **小林傳司**. 2025. コメント掲載「日本学術会議の法人化　法律から消えた「平和」、国会への助言が課題」, 『朝日新聞』10 月 2 日電子版, 2025 年 10 月 2 日.

■ **小林傳司**. 2025. 講演「専門家の役割について：医療化する学術」, アスペン・エグゼクティブセミナー（奈良市, なら食と農の魅力創造国際大学校付属セミナーハウス）, 2025 年 10 月 11 日.

■ **小林傳司**. 2025. 講演「科学技術・イノベーションと社会：ELSI/RRI を考える意義」, 稲盛財団「新しい社会規範の構築」(京都市, 稲盛財団), 2025 年 10 月 17 日.

■ **小林傳司**. 2025 講演「科学技術・イノベーションと社会：ELSI/RRI を考える意義」, 政策研究大学院大学政策研究院参議会（東京, 政策研究大学院大学）, 2025 年 11 月 18 日.

■ **小林傳司**. 2026. 講演「社会技術研究開発事業の概況」, 総合地球環境研究所レビューセミナー（京都市, 総合地球環境研究所）, 2026 年 1 月 9 日.

■ **小林傳司**. 2026. 招待講演「『社会の中の、社会のための科学』をまじめに考えると」, 立命館大学 2025 年度 RARA（立命館先進研究アカデミー）記念講演会(京都市, 立命館大学朱雀校舎), 2026 年 3 月 16 日.

■ **平川秀幸**. 2025. ゲスト「どうなる！？未来の食」, 大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2025（吹田市, ららぽーと EXPOCITY）, 2025 年 10 月 18 日.

■ **八木絵香**. 2025. コメント掲載「核ごみ処分場　議論は低調」, 『読売新聞』, 5 月 11 日朝刊, 2025 年 5 月 11 日.

■ **八木絵香**. 2025. 企画, 進行「どうなる！？未来の学校」, サイエンスカフェ@千里公民館 第 23 回（豊中市, 千里公民館）, 2025 年 6 月 21 日.

■ **八木絵香**. 2025. 企画・講師, SEEDS2025 分野横断型ワークショップ「『新しい科学技術との付き合い方』を考える」(豊中市, 大阪大学）, 2025 年 8 月 23 日.

■ **八木絵香**. 2025. 企画, 進行「地域での『気候市民会議』開催に向けたセミナー＆勉強会: 『地球温暖化や地球環境問題をジブンゴトにする』」(大阪市, 大阪大学中之島センター）, 2025 年 10 月 21 日.

■ **八木絵香**. 2025. 企画, 進行ワークショップ「気候市民会議の実施をめぐる課題と対応策を考える」(豊中市, 大阪大学豊中キャンパス）, 2025 年 12 月 11 日.

■ **辻田俊哉**. 2025.コメント出演, ニュース 7（NHK）「イスラエルがイラン国営放送局攻撃 イラン“全面戦争の準備”」, 2025 年 6 月 17 日.

■ **辻田俊哉**. 2025. コメント掲載「イスラエル 消耗を回避」, 『読売新聞』, 6 月 25 日, 2025 年 6 月 25 日.

■ **辻田俊哉**. 2025. オンライン出演, 国際報道 2025（NHK BS)「ガザ戦闘開始から 2 年」, 2025 年 10 月 6 日.

■ **鹿野祐介**. 2025. 企画, 進行「ワークショップ ～メルカリと考える『学び』のカタチ～」(豊中市, 大阪大学）, 2025 年 6 月 6 日.

■ **鹿野祐介**. 2025. 企画・講師, SEEDS2025 分野横断型ワークショップ「『新しい科学技術との付き合い方』を考える」(豊中市, 大阪大学）, 2025 年 8 月 23 日.

■ **鹿野祐介**. 2025. ゲスト「どうなる！？未来の食」, 大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2025（吹田市, ららぽーと EXPOCITY）, 2025 年 10 月 18 日.

■ **鹿野祐介.** 2025. ポスター発表「企業のなかに責任ある研究開発文化を醸成する— ELSI 研修プログラムの開発と設計—」, 第 10 回大阪大学豊中地区研究交流会（豊中市, 大阪大学）, 2025 年 12 月 5 日.

■ **神里達博.** 2025. 講演「IT と民主主義」, 愛知県弁護士会主催「ネット空間にあるのはリアル民意？それともバーチャ

ル民意？－兵庫県知事選で何が起きたかを踏まえて」（名古屋市，愛知県弁護士会館／リモート），2025 年 6 月 28 日.

- **岸本充生**. 2025. パネリスト「Society5.0 実現に向けた大阪・関西万博におけるデータ利活用の取り組み」，大阪・関西万博テーマ事業「いのちを響き合わせる」（大阪市、大阪万博), 2025 年 6 月 27 日.
- 是川夕，南澤孝太，**岸本充生**. 2025. 鼎談「科学技術×多文化共生 多文化共生社会とテクノロジーがどう向き合うのか」，『日立財団グローバル ソサエティ レビュー』, 2025 年 6 月.
- **水町衣里**. 2025. 企画「どうなる！？未来の学校」，サイエンスカフェ@千里公民館 第 23 回（豊中市，千里公民館），2025 年 6 月 21 日.
- **水町衣里**. 2025. 企画・講師, SEEDS2025 分野横断型ワークショップ「『新しい科学技術との付き合い方』を考える」（豊中市，大阪大学），2025 年 8 月 23 日.
- **水町衣里**. 2025. 企画「どうなる！？未来の食」，大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2025（吹田市，らら ぽーと EXPOCITY），2025 年 10 月 18 日.
- **水町衣里**. 2025. 企画「未来の食を考える」，くらしかん祭り 2025（豊中市，生活情報センターくらしかん），2025 年 10 月 25 日.
- **水町衣里**. 2025. 講演「そもそも ELSI とは〜研究における重要性と求められる対応」，FD・SD セミナー「教育分野で研究を進める上での ELSI（倫理的・法的・社会的課題)」（大阪市，大阪教育大学天王寺キャンパスみらい教育共創館），2025 年 10 月 29 日.
- **水町衣里**. 2026. 講演「科学技術と社会をつなぐ人材を育てる」，第 24 回国立大学未来共創シンポジウム「社会と学術をつなぐ人材の育成」（オンライン），2026 年 1 月 16 日.
- **水町衣里**. 2026. パネリスト「社会と学術をつなぐ人材の育成」，第 24 回国立大学未来共創シンポジウム「社会と学術をつなぐ人材の育成」（オンライン），2026 年 1 月 16 日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Mitsuhiro Shikamura, Atsushi Takayama, Kasumi Yokogawa, **Koji Kawakami**. 2025. Temporal risk patterns of severe hypovolemia associated with sodium-glucose cotransporter-2 inhibitors in patients with type 2 diabetes mellitus: A self-controlled case series study. Diabetes, Obesity & Metabolism, DOI: 10.1111/dom.16259, 2025 年 5 月．研究論文

- Takanori Yanai, Satomi Yoshida, **Koji Kawakami**. 2025. Gastroenteritis hospitalizations over 19 years before and after introduction of rotavirus vaccine in Japan: A nationwide claims database. Vaccine, 55: 127027, 2025 年 5 月．研究論文

- Masahiro Noda, Satomi Yoshida, Tetsuya Tsuchida, Masato Takeuchi, Chihiro Kawakami, **Koji Kawakami**, Shuichi Ito, Japan Environment and Children's Study Group. 2025. Investigating the association between parental educational status and offspring obesity risk using the Japan Environment and Children's Study study. Pediatric Obesity, DOI: 10.1111/ijpo.70019, 2025 年 5 月．研究論文

- Kayoko Mizuno, Yo Kishimoto, Masato Takeuchi, Koichi Omori, **Koji Kawakami**. 2025. Demographic and clinical trends in adult tracheostomy: Analysis of a Japanese inpatient database. Laryngoscope, doi.org/10.1002/lary.32206, 2025 年 8 月．研究論文

- Ayano Hayashi, Kayoko Mizuno, Kanna Shinkawa, Kazunori Sakoda, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Motoko Yanagita, **Koji Kawakami**. 2025. Association between tonsillectomy plus steroid pulse therapy and renal outcomes in patients with IgA nephropathy: A retrospective cohort study. BMC Nephrology, 2025 年 8 月．研究論文

- Sachiyo Shirakawa, Takanori Yanai, **Koji Kawakami**. 2025. Newly developed drugs for hepatocellular carcinoma expanded the use of systemic therapy: An interrupted time series analysis using an electronic medical record in Japan. Oncology, 11:1-11. doi: 10.1159/000547883, 2025 年 8 月．研究論文

- 木村聡，深澤俊貴，水野佳世子，**川上浩司**，江木盛時．エビデンスからみた本邦における小児心臓手術周術期管理の実態. Cardiovascular Anesthesia, 29(1): 21-35, 2025. 2025 年 9 月．研究論文

- Shunsuke Hiroki, Toshiki Fukasawa, Kasumi Yokogawa, **Koji Kawakami**. 2025. Effectiveness of metformin in preventing herpes zoster among Japanese patients with type 2 diabetes: A target trial emulation. Journal of Medical Virology, 97:e70606, 2025 年 9 月．研究論文

- Rie Matsushita, Sachiko Tanaka, Misaki Nakahata, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Chihiro Kawakami, **Koji Kawakami**, Shuichi Ito, The Japan Environment Children's Study Group. 2025. Association of maternal fat and nutritional intake in the peri-conception period with the sex of offspring in the Japan Environment and Children's Study: A large-scale birth cohort study. Journal of Developmental Origins of Health and Disease, 16: e38 1-8, 2025 年 10 月．研究論文

- Atsushi Takayama, **Shiho Koizumi**, Yoshihito Kato, Tatsuya Isomura, Tatsuyuki Hosoya, **Koji Kawakami**. 2025. Validation and cultural adaptation of the Japanese version of the Self-Care Inventory across different research settings: A cross-sectional study. Environmental Health and Preventive Medicine, 30:85. doi: 10.1265/ehpm.25-00209, 2025 年 10 月．研究論文

- Takenori Akaike, Satomi Yoshida, Toshiki Fukasawa, Etsuro Nakanishi, Ryosuke Takahashi, Soichiro Masuda, **Koji Kawakami**. 2025. Risk of traumatic injury in patients with early-onset Parkinson's disease: A population-based matched cohort study. Parkinson's disease, doi.org/10.1155/padi/6970763, 2025 年 10 月．研究論文

- Ryosuke Mizuno, Ryosuke Okamura, Atsushi Takayama, Kentaro Goto, Yoshiro Itatani, Susumu Inamoto, Takehito Yamamoto, Rei Mizuno, Ryo Takahashi, Nobu Oshima, Tetsuya Shiota, Masahiro Yamada, Ryo Matsusue, Tadayoshi

Yamaura, Mami Yoshitomi, Teppei Murakami, Kae Okoshi, Yasunori Deguchi, Satoshi Nagayama, Keiji Nagata, Koya Hida, **Koji Kawakami**, Kazutaka Obama. 2025. Robotic surgery enhances long-term survival in rectal cancer: A propensity score-weighted multicenter cohort study. Surgical Endoscopy, 39(12):8590-8599. doi: 10.1007/s00464-025-12278-z, 2025 年 10 月. 研究論文

- Hiroki Shimada, Kayoko Mizuno, **Koji Kawakami**. 2025. Comparative effectiveness of sodium zirconium cyclosilicate versus calcium polystyrene sulfonate for patients with heart failure. Heart and Vessels, doi: 10.1007/s00380-025-02609-4, 2025 年 10 月. 研究論文

- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Shuichi Matsuda, **Koji Kawakami**. 2025. Methodological concerns, implausibly early fracture reduction, and potential outcome misclassification: Comment on "Comparative effectiveness of romosozumab versus teriparatide for fracture prevention: A new-user, active comparator design." Bone, 199:117547. doi: 10.1016/j.bone.2025.117547, 2025 年 10 月. 研究論文

- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Shuichi Matsuda, **Koji Kawakami**. 2025. One-year body mass index change and subsequent risk of lumbar disc herniation: A population-based cohort study of 4 million adults. doi: 10.1007/s00586-025-09508-2, 2025 年 10 月. 研究論文

- Takuya Takami, Kayoko Mizuno, Kazutaka Obama, **Koji Kawakami**. 2025. Impact of perioperative vasodilator therapy for surgical cases of non-occlusive mesenteric ischemia. Journal of Surgical Research, 315:70-78, 2025 年 11 月. 研究論文

- Takaki Yoshiyama, Toshiki Fukasawa, Soichiro Masuda, Shuichi Matsuda, **Koji Kawakami**. 2025. Persistence of romosozumab vs. teriparatide in Japanese older adults aged ≥ 75 years with osteoporosis: A population based cohort study. Archives of Osteoporosis, 21: 14, 2025 年 12 月. 研究論文

- Hiroshi Yonekura, Tasuku Fujii, **Koji Kawakami**, Koichi Akiyama. 2025. The impact of frailty on postoperative complications and resource utilization in patients with severe aortic stenosis undergoing transcatheter aortic valve implantation (TAVI). in press, Nagoya Journal of Medical Science, 2025 年. 研究論文

- Yoko M. Nakao, Toshiki Fukasawa, **Koji Kawakami**. 2026. From insurance records to epidemiology: Provenance and processing of Japanese claims data. Annals of Clinical Epidemiology, 2026 年 1 月. 研究論文

- Yuichiro Mori, Toshiaki Komura, Motohiko Adomi, Ryuichiro Yagi, Shingo Fukuma, **Koji Kawakami**, Naoki Kondo, Yusuke Tsugawa, Daisuke Yabe, Motoko Yanagita, Kosuke Inoue. 2026. Heterogeneous cardiovascular effects of SGLT2 inhibitors in Type 2 diabetes: A causal forest and target trial emulation study. European Journal of Preventive Cardiology, 33(1):80-88. doi: 10.1093/eurjpc/zwaf539, 2026 年 1 月. 研究論文

- Ryuya Yamamoto, Yoko M. Nakao, Satomi Yoshida, **Megumi Yuno**, **Carl B. Becker**, **Takeo Nakayama**, **Koji Kawakami**. 2026. Job Loss after Cancer Diagnosis among Working-Age Cancer Survivors. Cancer Epidemiol Biomarkers Prev. Cancer Epidemiology, Biomarkers & Prevention, 35(2):284-291, 2026 年 2 月. 研究論文

- **伊勢田哲治**. 2025. 『倫理思考トレーニング』, ちくま新書, 2025 年 9 月. 著書

- **関山健**. 2025. 「気候変動と災害」, 中林美恵子（編）, 『危機管理の基礎と実践』, 三和書籍, 2025 年 4 月. 著書

- Yuzue N, **Sekiyama T**. 2025. Defining Economic Security through Literature Review. *Frontiers in Political Science*, 7, 1501986, (CI:1.6). 2025 年 4 月. 研究論文

- **Sekiyama T**. 2025. Considering Economic Security Focusing on Food and Energy Security. *Security Studies*, 7 (1), 114-129. 2025 年 4 月. 研究論文

- **関山健**. 2025.『稼ぐ小国－世界で沈む日本が成功した 6 つの国に学べること』, 光文社新書. 2025 年 5 月. 編著書

- **Sekiyama T**. 2025. *Trilateral imperatives : Japan-India-EU cooperation on economic security*. Pentagon Press. 2025 年 8 月. 編著書

- Wang Z, **Sekiyama T**. 2025. Necessity and Feasibility Evaluation of Proposals for Reducing Domestic Violence

Victimization among High-Income Women in Japan. *総合生存学研究*, 5, 95-102. 2025 年 9 月. 研究論文

- Keerthiraj, **Sekiyama T**. 2025. Against the Universality of Categories: India, Japan, and the Limits of Modern IR Theory. *Frontiers in Political Science*, 7, 1647854. 2025 年 10 月. 研究論文

- Nishigabiraki M, **Sekiyama T**. 2025. The progress of research on the nexus between food security and biodiversity conservation: A systematic review. *Frontiers in Sustainable Food Systems*, 9, 1664633. 2025 年 10 月. 研究論文

- Shiori Hirase, Yurina Araki, Yoshihide Hattori, Ayako Aoki, Daisuke Fujiwara, Masataka Michigami, Tomoka Takatani-Nakase, Ikuo Fujii, **Shiroh Futaki**, Mitsunori Kirihata, Ikuhiko Nakase. 2025. Simple Cytosolic and Nuclear Introduction of Boron Compounds Using Cationic Lipids to Enhance Cancer Cell-killing Activity in Boron Neutron Capture Therapy. Biol. Pharm. Bull. 48(4), 344–354 (2025), DOI: 10.1248/bpb.b24-00651. 2025 年 4 月. 研究論文

- Junya Michibata, Yoshimasa Kawaguchi, Yusei Furuyama, Yoshihiro Sasaki, Kazunari Akiyoshi, **Shiroh Futaki**. 2025. Addition of Oligoarginine to a Membrane Permeabilizing Peptide M-lycotoxin Facilitates Intracellular Antibody Infusion from Microcondensate. Bioconjug. Chem. 36(7), 1494–1503 (2025), DOI: 10.1021/acs.bioconjchem.5c00176. 2025 年 7 月. 研究論文

- Masashi Kuriyama, Yoshimasa Kawaguchi, Shinji Ito, Junko Satoh, Hisaaki Hirose, **Shiroh Futaki**. 2025. Membrane Repair Proteins as Negative Regulators of Cytosolic Delivery Using Attenuated Cationic Lytic Peptide L17E and Cell-Penetrating Peptides: Differences and Similarities. Bioconjug. Chem. 36(8), 1683–1697 (2025), DOI: 10.1021/acs.bioconjchem.5c00177. 2025 年 7 月. 研究論文

- Yoshimasa Kawaguchi, Megumi Kiyokawa, Yusei Furuyama, **Shiroh Futaki**. 2025. e3MPH16: A D-Glutamic Acid–Substituted Peptide for Efficient and Low-Cytotoxicity Cytosolic Delivery of Macromolecules. Chem. Pharm. Bull. 73(9), 907–913 (2025), DOI: 10.1248/cpb.c25-00478. 2025 年 9 月. 研究論文

- Yoshimasa Kawaguchi, Naoki Tamemoto, Yusuke Uehata, Yusuke Miyazaki, Wataru Shinoda, **Shiroh Futaki**. 2025. A Melittin-Derived Peptide with Improved Cytosolic Delivery Efficiency Through Caveolae- and Actin-Mediated Endocytosis. *Chem. Pharm. Bull.* 73(9), 896–906 (2025), DOI: 10.1248/cpb.c25-00479. 2025 年 9 月. 研究論文

- Yoshimasa Kawaguchi, Ayumi Kikkawa, Seigo Kimura, Hiroshi Abe, **Shiroh Futaki**. 2025. Microcondensate-Mediated Intracellular Infusion of mRNA Across the Plasma Membrane. Angew. Chem. Int. Ed. 65(1), e12139 (2025), DOI: 10.1002/anie.202512139. 2025 年 11 月. 研究論文

- Keito Obata, Kamui Tanaka, **Shiroh Futaki**, Miki Imanishi. 2025. Structural Control of RNA Demethylation: G-Quadruplex Proximity Suppresses ALKBH5 Activity. Chem. Eur. J. 31(71), e01788 (2025), DOI: 10.1002/chem.202501788. 2025 年 12 月. 研究論文

- Naka Kudo Ida, Yoshimasa Kawaguchi, **Shiroh Futaki**, Miki Imanishi. 2025. Discovery and Characterization of a High-affinity G-quadruplex Binding Peptide via mRNA Display. Bioorg. Med. Chem. 118543 (2025), DOI: 10.1016/j.bmc.2025.118543. 2025 年 12 月. 研究論文

- Yuna Nakagawa, Yoshimasa Kawaguchi, Hisaaki Hirose, Takao Hashiguchi, Joseph Lee, Akitsu Hotta, Jun Kawamoto, Michihito Sasaki, Hirofumi Sawa, **Shiroh Futaki**. 2026. SARS-CoV-2 Inhibition through mRNA Delivery Using Engineered Extracellular Vesicles Displaying the Spike Protein. Biomaterials 325, 123594 (2026), DOI: 10.1016/j.biomaterials.2025.123594. 2026 年 2 月. 研究論文

- Hirayama K, **Becker CB**, Wada T, Ishimoto Y, Fujisawa M, Kimura Y, Nose M, Ohtsuru S, Matsubayashi K, Sakamoto R. 2025. Cultural pathways to well-being in aging Japan: Exploring the meaning of "Good to Have Been Alive" through generativity, nature, and intergenerational connection. *International Psychogeriatrics*, 100171. DOI: 10.1016/j.inpsyc.2025.100171. 2025 年 12 月. 研究論文

- **カール・ベッカー**. 2025. 日本仏教とお寺の行方. 『道標』冬季号 1-2. 2025 年 12 月. 寄稿

- Someko H, **Nakayama T**, **Koizumi S**, **Becker CB**, Tabuchi T, Ishikawa S, Yamamoto Y. 2026. Medication adherence and

functional food use in patients with hypertension: a cross sectional study. Hypertension Research. DOI: 10.1101/2025.08.20.25334126. 2026 年 1 月. 研究論文

- **吉田恭**. 2025.「大規模物流施設の『まちづくり』による『つながり』の創出」, 都市計画報告集 24(1) 134-141. 2025 年 5 月. 研究論文
- **宮野公樹**. 2025.「社交としての産と学――これからの（＝本来の）在り方へ」,『現代思想』, 2025 年 10 月号. 2025 年 10 月. 寄稿
- **宮野公樹**. 2025.「多様性豊かな研究をはぐくむ土壌づくり～京都大学における事例紹介～」, リサーチ・アドミニストレーション協議会誌, vol.03. 2025 年 10 月. 共著
- **宮野公樹**. 2025.「学術知とはー「学問」と「研究」の関係ー」, 名古屋工業大学紀要「Trans/Actions」第 10 号：54-66, 2025 年 11 月. 寄稿
- **祐野恵**. 2026.「ヘルスケアデータの利活用と市民参画」,『医療福祉政策研究』, 9(1). 2026 年 3 月. 研究論文

学会発表等

- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Shoichiro Inokuchi, Bungo Otsuki, Koichi Murata, Takayoshi Shimizu, Takashi Sono, Shintaro Honda, Koichiro Shima, Masaki Sakamoto, Shuichi Matsuda, **Koji Kawakami**. 2025. Early prediction of functional impairment at hospital discharge in patients with osteoporotic vertebral fracture: A machine learning approach. 第 54 回日本脊椎脊髄病学会（東京）, 2025 年 4 月 17～19 日, 口演発表
- 田中佐智子, 藤本健一, 三島和夫, 阪田幸則, 深澤俊貴, 水野佳世子, 古戎道典, 久保田直樹, Margaret Moline, 石井美佳, **川上浩司**. 2025. 小児における睡眠薬の使用実態：診療報酬請求データベースを用いた記述疫学研究. 第 49 回日本睡眠学会定期学術集会（広島）, 2025 年 6 月 28～30 日, ポスター発表
- 池田有梨奈, **小泉志保**, **祐野恵**, **Carl Becker**, **佐野亘**, **川上浩司**. 2025. 日本における市区町村産後ケア事業の提供状況：ウェブサイトデータを用いた記述研究. 日本医療政策学会 第 1 回学術集会. （神奈川県横浜市）2025 年 6 月 28 日. 口演発表
- 白川幸代, 矢内貴憲, **川上浩司**. 2025. 肝細胞癌の薬物療法の発展に伴う本邦の初回治療選択の変遷：電子カルテ情報を用いた分割時系列分析. 第 61 回日本肝癌研究会（神戸）, 2025 年 7 月 10～11 日, 口演発表
- 山本竜也, 中尾葉子, **川上浩司**. 2025. 労働世代の消化器がん生存者におけるがん診断後の離職状況と離職関連因子の検討: コホート研究. 第 80 回日本消化器病学会総会（神戸）, 2025 年 7 月 16～18 日, 口演発表
- 竹内正人, 篠崎智大, **川上浩司**. 2025. 特定健診の糖尿病・高血圧の一次予防効果:SKDB を用いた標的試験法による追加検証. 第 84 回 日本公衆衛生学会総会（静岡）, 2025 年 10 月 29～31 日, ポスター発表
- 矢内貴憲, 吉田都美, **川上浩司**. 2025. 小児頭蓋変形と自閉症スペクトラム障害との関連性：大規模データベースによる検討. 第 84 回 日本公衆衛生学会総会（静岡）, 2025 年 10 月 29～31 日, ポスター発表
- 安納崇之, 深澤俊貴, **川上浩司**. 2025. 慢性硬膜下血腫術後の抗血小板薬の早期再開と再発リスク：標的試験エミュレーション. 第 84 回日本脳神経外科学会学術総会（横浜）, 2025 年 10 月 29 日～11 月 1 日, ポスター発表
- 松本恵実, 矢内貴憲, 深澤俊貴, 大倉敬之, **川上浩司**. 2025. 経口 β-ラクタム系抗菌薬の使用に伴う熱性けいれんのリスク：実薬対照を用いたケース・クロスオーバー研究. 第 30 回日本薬剤疫学会学術総会（東京）, 2025 年 10 月 31 日～11 月 2 日, ポスター発表
- Ryosuke Mizuno, Ryosuke Okamura, Kae Okoshi, Japan Baptist Hospital, Yasunori Deguchi, Keiji Nagata, Shinya Hamasu, Keita Hanada, Rei Mizuno, Ben Sasaki, Shusaku Honma, Hisatsugu Maekawa, Ryo Matsusue, Teppei Murakami, Susumu Inamoto, Ryo Takahashi, Tetsuya Shiota, Tadayoshi Yamaura, Mami Yoshitomi, Amagasaki, Satoshi Nagayama, **Koji Kawakami**, Kazutaka Obama. 2025. Short- and mid-term outcomes of minimally invasive surgery for obstructive colon

cancer: A multicenter cohort study in Japan. The 21st World Congress of Endoscopic Surgery – 17th Asia-Pacific Congress of ELSA, Singapore, November 5-8, 2025, 口演発表

- Takanori Yanai, Satomi Yoshida, **Koji Kawakami**. 2025. Comprehensive evaluation of maternal drug exposures and offspring autism: From a nationwide database. 17th Asian Conference for Pharmacoepidemiology, Honk Kong, November 11-13, 2025, ポスター発表

- Kayoko Mizuno, Yo Kishimoto, Masato Takeuchi, Koichi Omori, **Koji Kawakami**. 2026. Adult tracheostomy in Japan: Demographic profiles, clinical outcomes, and time trends. 第 36 回日本疫学会学術総会・第 3 回国際疫学会西太平洋地域合同学術集会（長崎）, 2026 年 1 月 28 日- 30 日. ポスター発表

- Atsushi Takayama, Shiro Tanaka, **Koji Kawakami**. 2026. Target trial emulation under non-mutually exclusive assignment: Structural pitfalls and methodological remedies. 第 36 回日本疫学会学術総会・第 3 回国際疫学会西太平洋地域合同学術集会（長崎）, 2026 年 1 月 28 日- 30 日. ポスター発表

- **伊勢田哲治**. 2025. 「倫理学は法や宗教から何が学べるか」, 主題別討議「動物をめぐる法・宗教・倫理」提題, 日本倫理学会第 76 回大会（仙台）, 2025 年 10 月 11 日. 講演

- **Becker Carl**. 2025. “How First Responders Help Mourners in Grief.” Association for Death Education and Counseling (Albuquerque, NM., USA). 2025 年 4 月. 招待講演

- **Becker Carl**. 2025. “Asian Spirituality for Dying Patients, Families, and Bereaved.” Zoom Conference on Grief and Spirituality (Stockholm University, Sweden). 2025 年 8 月. 招待講演

- **Becker Carl, Koizumi Shiho**, Ide Kazuki, Mori Takuya. 2025. “ELSI of Medical AI.” 日本医療哲学医療倫理学会国際会議. 神奈川県立大学（横浜）. 2025 年 9 月. シンポジム報告

- 多和実月, **小泉志保**, 本多由起子, 丹羽良太, **Carl Becker**. 2025. 体験学習型歯科保健教育がもたらす児童の行動変化: 探索的質的研究. 第 89 回全国学校歯科保健研究大会. （広島県広島市）2025 年 10 月 17 日. ポスター発表

- **宮野公樹**. 2025. 「改めて学問とは何か〜よく生きる(=よく死ぬ)ための探求〜」. 日本看護技術学会第 23 回学術集会（京都大学, 京都市）. 2025 年 10 月 12 日. 招待講演

- 安藤加菜子, **祐野恵**. 2025. 「EBPM と行政の専門性：博士人材の活用に関する国際比較」, 日本公共政策学会 2025 年度研究大会　公募セッション, 2025 年 6 月 15 日.

- **Yuno Megumi**. 2025. Promoting Factor to Utilize Expertise. EGPA at 50 Prospects for Public Administration across Europe. (London, UK) 2025.8/26-28. 口演発表.

- **祐野恵**. 2025. 「日本における EBPM の実像：科学技術政策を事例として」, 日本科学哲学会第 58 回(2025 年度)大会 (中央大学, 八王子市), 2025 年 11 月 29 日. 口演発表.

- **祐野恵**, 安藤加菜子. 2025. 「科学技術政策と人事制度－博士人材が果たす役割・博士人材を巡る環境」, 日本公共政策学会関西支部第 85 回例会（オンライン）, 2025 年 12 月 20 日. 口演発表.

- **小泉志保**. 2025. 医療 AI の『人間らしさ』とは？医療現場で用いる対話型 AI ツールの『人間らしさ』尺度と倫理性を考える. トヨタ財団 特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」第 9 期オンラインカフェミーティング. （オンライン）2025 年 8 月 5 日. 口演発表

- **小泉志保**, 井出和希. 2025. 日本の医学雑誌の投稿規定における研究公正の記述： ICMJE Recommendations の記載項目の評価. 研究公正研究会 2025_静岡. （静岡県静岡市）2025 年 9 月 21 日. 口演発表

- **小泉志保**. 2025. 生成 AI を用いた医療情報の伝達：リテラシーとコミュニケーションの観点からの文献レビュー. ヘルスコミュニケーションウィーク 2025. （東京都文京区）2025 年 10 月 4 日. ポスター発表

- **小泉志保**. 2025. 医療 AI 導入に向けた社会的言語尺度の開発及び倫理的・法的・社会的課題への対応. トヨタ財団「研究助成×先端技術 合同ワークショップ 2025」. （東京都新宿区）2025 年 10 月 18 日. ポスター発表

■ **小泉志保**, 竹下昌志, 古結敦士. 2025. 医療 AI におけるヒューマニティと倫理. 日本生命倫理学会第 37 回年次大会.（岩手県盛岡市）2025 年 11 月 22 日. シンポジウム座長、報告

社会活動（講演会・展示会などアウトリーチ活動等）

■ **川上浩司**. 2025. 講演. 鹿児島県大島郡瀬戸内町「福祉週間」制定記念式典　座長講演（奄美大島）. 2025 年 5 月 24 日.

■ **伊勢田哲治**, 山敷庸亮. 2025. 誌上対談. 「いつか地球に住めなくなる日の前に」, 特集「テラフォーミング　惑星改造の技術と思想」, 『現代思想』, 2025 年 6 月号, pp. 8-26.

■ **伊勢田哲治**. 2025. テレビ出演. 「ダークサイドミステリー　“神秘の力”のフェイクを暴け! 超能力者 vs.マジシャン 40 年バトル」, NHKBS, 2025 年 12 月 5 日.

■ **川崎穂高.** 2025. 講演.「地方分権の経過と今後の展望」(鳥取県市町村職員研修). 鳥取県市町村振興協会（倉吉）. 2025 年 11 月 5 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “Spirituality in Caring for the Dying: Meaning, Counseling, and Experience in Caring, Dying, and Grieving.” (St. Patrick’s Church, Irvine, California) 2025 年 4 月 7 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “Why Funerals Matter—and How to Make Them Even Better.” (Forest Lawn Mortuary, Glendale, CA) 2025 年 4 月 8 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “Why Funerals Matter – and How to Help Mourners in Grief.” FIAT-IFTA International Conference. (Yokohama Pacifico) 2025 年 6 月 4 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “Rituals in Grief Literacy.” International Working Group on Death, Dying, and Bereavement Conference. (Fremantle, Australia) 2025 年 6 月 27 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “Why we need Grief Care—and how to do it.” (Online presentation to Grief Care Workers in Holland and Belgium) 2025 年 8 月 4 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “A Thousand Years of NDEs in Sino-Japanese Buddhism: Where Next?” International Association of Near-Death Studies 50th Anniversary Conference, (Oak Brook, IL., USA). 2025 年 8 月 28 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演.「日本人の死生観を活かすグリーフ ケア」知恩院オンライン会議.（京都）2025 年 10 月 22 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. 「生成 AI と共生は可能か」 先端技術倫理学会オンライン大会. 2025 年 11 月 2 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. 「日本人の死生観を活かすグリーフ ケア: 死を意識してどう生きる？」十全総合病院. （新居浜） 2025 年 11 月 15 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. “Long Life and After Life.” (Hongwanji Betsuin, Honolulu, HI) 2025 年 12 月 26 日.

■ **Becker Carl**. 2025. 講演. How we know Amida: A Matter of Life and Death.” (Moiliili Hongwanji, Honolulu, HI) 2025 年 12 月 28 日.

■ **Becker Carl**. 2026. 講演. 天理大学理事会 「AI 時代における大学の生き残り政策」 2026 年 1 月 21 日.

■ **宮野公樹**. 2025. 講義. 「”学び”の学びについて」, 東京理科大学オープンカレッジ, 2025 年 5 月 16 日.

■ **宮野公樹**. 2025. 放送. ETV 特集「ねちねちと問うーある学者の果なき対話ー」, NHK, 2025 年 5 月 17 日.

■ **宮野公樹**. 2025. 講義. 「これからの社会人リーターに必要な学びとは」, 京都大学 ELP ミニ講義, 2025 年 6 月 20 日.

■ **宮野公樹**. 2025. 講義. 「学びとキャリア」, 立命館大学, 2025 年 7 月 2 日.

- **宮野公樹**. 2025. 登壇・司会, 「私たちの問いを社会に発信する意味」, 日経ＳＴＥＡＭスペシャルセミナー　日本経済新聞社, 2025 年 7 月 24 日.
- **宮野公樹**. 2025. 講演. 「対立マネジメントという問い」, STEAM Association, 2025 年 7 月 31 日.
- **宮野公樹**. 2025. 招待講演. 「学問と身体」, 仙台大学, 2025 年 8 月 3 日.
- **宮野公樹**. 2025. 講演. 「京都の「問い」」, EXPO KYOTO 超 SDGs みらいラボ, SDGs KYOTO TIMES, 2025 年 8 月 4 日.
- **宮野公樹**. 2025. 登壇＆司会, NIKKEI STEAM SYMPOSIUM, 2025 年 8 月 8 日.
- **宮野公樹**. 2025. 招待講演. 「業界を超える「学際」で新たな価値をつくる」,academist Prize 第 4 期　Inspired.Lab,アカデミスト株式会社, 2025 年 8 月 28 日.
- **宮野公樹**. 2025. 講演. 「異分野融合、実践と思想のあいだ。―「総合知」や「学際」の問い直しから見据える学問論―」, iRING Teal16 セミナー, 京都大学工学研究科次世代学際院, 2025 年 9 月 12 日.
- **宮野公樹**. 2025. 基調講演. 「異分野融合のダイナミクスー学問本来の在り方を添えてー」, 九州大学アジアウィーク, 2025 年 11 月 9 日.
- **祐野恵**. 2025. 講演[出演]. 「健康情報の基盤整備を規定する要因：政策能力・EBPM・行政の専門性」, 国立社会保障・人口問題研究所（オンライン）, 2025 年 8 月 5 日.
- **小泉志保**. 2025. 講演. 生成 AI 時代の論文作成方法〜論文の質を損なわずに生産性を高めるためには？ 京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構（iACT） 2025 年度臨床研究推進セミナー特別企画第一弾. （オンライン）2025 年 4 月 24 日.
- **小泉志保**, 西村多寿子. 2025. 企画立案・運営等, 司会・セッションチェア. 日本メディカルライター協会 第 28 回 JMCA サロン 生成 AI ライティングワークショップ：初級編 ―基本から現場で使える書き方まで、プロンプト設計の実践入門―. 日本メディカルライター協会. （オンライン）2025 年 5 月 26 日.
- **小泉志保**. 2025. 講演. 医学論文作成時に配慮すべき出版倫理とはなにか？〜研究公正項目と撤回論文の調査から考える〜. 滋賀医科大学 2025 年度 第 1 回 研究倫理教育研修会. （滋賀県大津市）2025 年 7 月 25 日.
- **小泉志保**, 小松正, 井出和希, 古結敦士, 森拓也. 2025. 企画, 運営参加・支援, 実演. あなたはどのタイプ？医療 AI で重視すること. 京都大学総合研究推進本部 京都大学アカデミックデイ 2025.（京都府京都市）2025 年 9 月 27 日.
- **小泉志保**. 2025. 講演. 医療 AI の動向と倫理的課題. 京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門 講演会. （京都市）2025 年 12 月 22 日.
- **小泉志保**. 2026. 講演. 個の IKIGAI が社会を変える. リカバリーカレッジ HARIMA 講演会. （加古川市）2026 年 1 月 17 日.

公共圏における
科学技術・教育研究拠点（STiPS）
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

公共圏における科学技術 活動報告 2025

2026年3月発行
編集・発行　公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
〒560-0043　大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL　06-6850-6111（大阪大学代表）
URL　http://stips.jp/
E-mail　stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp

本拠点は、文部科学省による「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』」推進事業の
基盤的研究・人材育成拠点に採択されて運営されています。